



岩永真治教授

(専攻 都市社会学、地域社会論、まちづくりの社会学、グローバル社会学)

ὄνειρος ὁ βίος, ὃν οἱ θεοὶ φιλοῦσιν ἀποθνήσκει νέος. Μένανδρος

「人生は夢であり、神々が愛するひとは若くして死ぬ。」(メナンドロス)

ἐὰν βούλη, δυνήσῃ. Ξενοφών

「もし欲すれば、あなたはできるであろう。」(クセノポーン)

(1) 社会学とはどのような学問とお考えですか。

基本的には、[社会学](#)というのは社会学者の数だけあると考えています。その学問上の独自性は、研究対象にあるというよりも、むしろ対象にたいする独自のアプローチにあるといったほうがよいでしょう。もちろん、独自のアプローチが他の学問にはない独自の研究対象を浮かびあがらせるのであれば、社会学の学問上の独自性は研究対象の独自性にあるということにもなります。事実、社会学確立期の巨人たち([ジンメル](#)、[デュルケーム](#)、[ヴェーバー](#)、[パレート](#)など)の足跡は、既存の学問的な枠組みからは十分にアプローチできないある研究対象を発見すると同時に、その研究対象へのアプローチの仕方を確立し、そしてそのアプローチを社会学と名づけるという試みの繰り返しでした。そして現在も、哲学、文学、心理学、歴史学、経済学、政治学、地理学、建築学、都市計画学、医学、精神分析、美学などに固有の対象と交わりながら、しかしそれらとは少しズレたところに対象を設定することが、あるいは社会それ自体との関係においてそれぞれの学問の対象を考察することが、実際に社会学の学問的な営みになっています。

す。ちなみに、社会学という学問の基本的な関心は、「社会秩序はいかにして可能か」にあるといえるでしょう。

わたし自身は、ミクロな社会やマクロな社会やグローバルな社会を研究する基本的な視座として、「^グ分業と^シ所有の社会学」というのを考えています。したがって、現在のわたしにとっては「分業と所有の諸形態」が社会学の研究対象です。古典ギリシア語でヘクシス（ἕξις）という言葉は、人間とその内的、外的な対象とのあいだにできる所有関係を意味します。この古典ギリシア語のヘクシス（ラテン語ではハビトゥス habitus になりますが、このギリシア語とラテン語のあいだにある意味の広がりのちがいが重要です）という言葉に始原的に示されている過程を、わたしは広げて解釈し、時代における個々人の行為の様式と社会的に生産されていく（＝分割され再結合されていく）^ネ労働＝^ル生命活動の様式とのあいだの関係性（すなわち、分業の歴史的、社会的な展開の形態）と、そういう関係性としての個々人による空間の実践的な領有の様式（すなわち、所有の歴史的、社会的な諸形態）として捉えようと試みているのです。この「ヘクシスの社会学」によって、歴史的、地域的な^{コイノニア}共同体の同一性と種差があきらかになり、また社会的相互行為の時代的な特質があきらかになるとわたしは考えています。もちろん、人間性と社会秩序の原理的な解明には、他の学問やアプローチの援けも借りなければならないでしょう。

「ヘクシスの社会学」における研究対象について：

「ヘクシスの社会学」（A Sociology of Hexis）は、あらゆるものに関する「^{アレテ}卓越性の社会学」（A Sociology of Excellences）であり、ま

た人間の倫理的あるいは道徳的な行為に関しては、「^{アレテ}徳の社会学」(A Sociology of Virtues)でもあります。それは「^{ソーマ}身体^{アレテ}の卓越性
 – ^{カキア}劣等性」をその外部環境や内部環境（すなわち、^{プシキケー}精神や心）
 との関係で取り扱う学問であり、また対人関係において取り扱う科学です。そこでは、^{アルケ}端緒=始点、可能態（=身につく力、身になる力）、^{エネルギー}現実態=現実の活動、完全現実態=完成形、^{テロス}目標=終局、^{パス}情緒・情念、
^{ヒュベルボレー}超過と^{エレプシス}不足、^{プレイオーン}過多と^{エラットーン}過少、^{メソテース}中庸、^{ト・メソソ}中的なもの、^{オレクシス}欲望・欲求
 （^{プーレー}願望・切望、^{エビチュミ}情動・情欲、^{チュモス}感情）、^{ヌーシ}知性（^{ヌーシ}直観知、^{プロネーシス}思慮、^{ソビイア}知恵、
^{ディアノイア}知的認識、^{プーレウシス}思考、^{エウプーリア}熟慮、^{ディノテース}才能）、^{ヘク}随意的なもの^シと^ア不随意的なもの、
^{ヘドネー}快樂（肉体的快樂、^ヘ精神的な^デ気持ちのよさ）と^{リュベ}苦痛、^{アナンカイア}必要不可欠なもの、
^{エピステーメ}学問的な知識、^{アイステーシス}感覚、^{アイステーテイクース}感覚的な認識、^{ト・アイスタネスタイ・エー・ノエイン}感覚され知的に把握されるもの、
^{シユン}共通感覚（=ともに感じる）、^ア無節制（=放縱、^シ放埒）と
^ア無抑制（=力のなさ）、^{ト・ハプロース・ディカイオン}単純な意味における正しさ、^{ト・ディカイオン・カタ・アクシアン}価値に応じた正しさ、
^{ト・カタ・アクシアン}各々の価値に応じたもの、^{ト・オルトン}真の正しさ、^{エビエイケース}適正さ・適切さ、^{エビエイケイア}公平・公正さ、
^{ホ・エビエイケース}公正で品格のあるひと、^{ト・シユンペローン・トーン・ディカイオン}相互共益的な正しさ、^{アントロービナ・ディカイア}人間的な正しさ、
^{カロス・カイ・エバイネトス}美しく立派でかつ賞賛されるべき、^{ホ・スプーダイオス}よいひと、^{ト・カタ・ロゴス・ゼーン}ロゴスに従って生きること、
^{タ・メタ・ロゴ}ロゴスと共にあること、^{トゥース・エビエイケイ・カイ・マカリウース}公正で品格があり幸福なひと、^{エウ・ポイウンテス}よくする側のひと、
^{エウエルゲシ}よくされる側の利益、^{アッラゲー}経済的交換と^{メタドシ}分与、^{アボディドミ}お返しをする、
^ア与えられたものに対して^ンふさわしい^タお返しをする、^ボふさわしいもの、
^{アンティドシ}財産交換、^{アンタポドシン}反対給付、^ハ卓越を求めて^ミ競い合う、
^{ホ・ヒュベルパッ}善の卓越において他に勝るひと、^{アミューネタイ・エウ・ドゥローン}他人に利益を与えることで返報する、

共に^{シユンベロ}運営する、共同性・共同態、比^{ト・アナログン}例、友人関係、親しい友人、
「もう一人の自分」^{アッロス・アウトス}としての友人、親しさ、好意^{ビイロテス}、協和^{エウノイア}、
共に^{シユンディアゲイン}時を過ごす、生を共にする、均等性・平等性^{ト・イソン}、均等・平等、類似性^{ホモイオテス}、
比例にもとづく相互共益性、民主主義^{アンティベポンツ・カタ・アナログアン}、自^{デモクラティア}由^{エレウテリアス・エルゴン}、数の上での平等^{ト・イソン・カタ・アリトウモン}、
余暇^{スコレス}、美しく立派なもの^{ト・カローン}、機知に富むひと^{エウトラベロス}、商売人的な^{アゴライオーン}、病的性向^{ノスース}、
動物性向^{テリオディス}などの諸次元が問題になります。

ところで、「ヘクシスのミクロ社会学」における研究の焦点は、「社会構造化されたものとしての身体」、すなわち「身体的ヘクシス」（身体の性向）です。経済的交換が優位である＜都市化され市場化された現代社会＞では、このヘクシスは「身体的資本」の様相（あるいは^{モイドス}形相）を帯びる傾向があります。

その「身体的ヘクシス」には、5つの次元があります。

第一に、「言語的ヘクシス」（卓越性－劣等性の関係）の次元があります。これは、人間が言葉を話す、あるいは互いに言葉を交わす動物であることに関連するヘクシス（＝性向）です。そして、第二に、この「言語的ヘクシス」が強く影響する次元として、「倫理的あるいは道徳的なヘクシス」（卓越性－劣等性の関係）があります。

このヘクシスは、人間が倫理的あるいは道徳的な^{モイトス}性格（あるいは人柄）を持つ動物であることに関連しています。そして、

「倫理的な卓越性」とは、「選^{ヘクシス・プロアイレティケー}択性向」(disposition or state of

choice and decision) であり、またここで「^{プロアイレシス}選択」(choice and decision)とは「^{オレクシス・ブーレウティケー}熟慮された欲求」(deliberate desire)を意味しています。それは「^{オレクシス・ディアノエーティケー}知性的な欲求」(desire related to thought)であると同時に、「^{オレクテイコス・ヌース}欲求的な直観知」(intuitive understanding or thought related to desire)でもあり、「^{オレクシス}欲求」と「^{ディアノイア}知性」の結合体」(a union of desire and intellect)です。それが人間の^{プラークシス}行為実践の「^{アルケー}端緒」になっているのです。そしてそれは、「^{プロアイレシス}選択性向の現われ」(appearance of selective disposition)なのです。

ともかく、^{プラークシス}行為実践の「^{アルケー}端緒」は「^{プロアイレシス}選択」であり、「^{プロアイレシス}選択」の「^{アルケー}端緒」は、「^{オレクシス}欲求」ならびに「^{ロゴス・ホ・ヘネカ・テイノス}目的を持った理性=言葉」です。そして、知性とか知性的な認識を欠如しても、倫理的あるいは道徳的なヘクシスを欠如しても、「^{プロアイレシス}選択」は成立しません。したがって、「^{エウ・プラクシア}実践」も生じません。「^{エウ・プラクシア}立派で美しい実践」は、

「^{ディアノイア}知性的認識」と「^{エートス}倫理的性格」の両者がなければ、生じ得ないのです。そして、アリストテレスによれば、「^{エートス}目的的で実践的な知性的認識」は、「^{ポイエーティケー}制作」という働きを支配するものなのです。(『ニコマコス倫理学』第6巻第2章、1139b)

それでは、「道具をもって制作する」という欲求を越えた、

「他人を愛する」という欲求は、どこから来るのでしょうか。それは、「友(の魂)を愛する」のか、「異性あるいは同性(の肉体)を愛する」のか、によって異なります。前者は、「卓越性の類似」^{ホモイオテース}から、後者は「快樂の探求」^{ヘドネー}から生じるものです。前者については、後でまた述べます。ちなみに、「制^{ポイ}作^{エーテイク}」の場合にはその目標^{テロス}は「制作それ自身」とは別のところにありますが、「行為の實踐」^{プラクシス}の場合には、「よくおこなうこと」^{エウプラクシア}それ自身が目標になっているという違いがあります。そして、この後の目標は、そのまま「よく生きること」^{エウゼー}につながっています。

そして、この「よく生きること」は、古代ギリシアにおけるメガラの詩人テオグニスもいっているように、「よき人びとと生を共にしていることによって」(ἐκ τοῦ σζῆν τοῖς ἀγαθοῖς, *Ηθικα Νικομαχεια*, 1170a12-13)可能になるものです。

第三に、知性的ヘクシス(卓越性－劣等性の関係)の次元があります。これは、文字通り人間が思考する動物であることに関連しています。第四に、「美的・感覺的卓越性(－劣等性)」^{アイステーテイク・アトテ}に関するヘクシスがあります。これは、人間が感覚を持つ動物であることに関連しています。そして、古典ギリシア語で感覚、感性、感覺的知覚をあらわすアイステーシス(αἴσθησις, *aisthēsis*)の意味するところにも関連しています*。

第五に、「生物学的卓越性－劣等性」をめぐるヘクシスの次元があります。これは人間が「健康である－病的である」という事を意識する動物であることに関係しています。第一から第四は、「文化的ヘクシス」とまとめて呼べるものです。

*ヘクシスの社会学は、人間の対象にたいする活動の傾向的特性とその構造化を問題にし分析する科学であり、たとえば「美的性向と趣味判断の社会学」や「芸術諸作品の法則に関する社会学的研究」として展開することが可能です。[ゲーテ](#)は、[『箴言と省察』](#)のなかで、「美は秘められた自然法則のひとつの現われである」といっていますが、じつは「美に関する現象」は、対象にむきあうひとつの行為や活動として、差別化された「社会法則」をもっていると考えられます。この「社会法則」は、ヘクシスの社会学にとって、今後の重要な分析課題のひとつです。

フランスでは、[ピエール・ブルデュー](#)という社会学者（2002年1月23日にパリで亡くなりました）が、類似の、しかし鑄型のちがったハビトゥスというラテン語由来の概念（ハビトゥスという語は実際、古典ギリシア語ヘクシスのラテン語訳です）で、同じ文化的差別化の問題に取り組んだことがあります。これは、おもに1960～70年代のフランス社会を対象にした研究です。研究の結果や成果は、[『ディスタンクシオン』](#)という著書で知ることができます。日本語訳は新評論、藤原書店から上・下二巻ででています。

もう少し敷衍してみましょう。繰り返しになりますが、身体的ヘクシス(身体の性向bodily hexis)には、大きく分けて二つ、「生物学的ヘクシス」と「文化的ヘクシス」があります。「文化的ヘクシス」は、さらに四つの次元に分類することができます。

第一に「言語的ヘクシス」と呼ばれるもので、「国語」や

「外国語」(日本語に対して中国語や韓国語のような、あるいはフランス語に対して英語やドイツ語のような)、「標準語」や「方言」(日本語に対して関西弁や東北弁のような、北京語に対して上海語や広東語のような)あるいは「地域語」(スペイン語に対してバスク語やバレンシア語のような)を「話すこと」が、それに当たります。ウクライーナにおけるロシア語とウクライーナ語の関係は、旧ソビエト社会主義連邦時代には「国語」「標準語」(＝都市－ロシア人、工場労働者の言語)と「地域語」「方言」(＝農村－ウクライーナ人、農民あるいはコサックの言語)との関係でしたが、現在では、ウクライーナ語が「国語」、ロシア語が「地域語」ないしは「外国語」になっています。「ロシア語交じりのウクライーナ語」(＝スルジク。ウクライーナ語、モルドバ語、ロシア語では [с у р ж и к](#)、英語表記は Surzhyk) は、混合的な「言語－身体的なヘクシス」ということになります。[この「混合的なヘクシス」が、ときにウクライーナにおけるナショナル・アイデンティティのあいまいさに寄与し、またウクライーナ東部紛争へのロシアの軍事的介入の根拠にもなっています。](#)

ちなみに、上記リンク先の都市オデーサの文化に関するエッセイにあるように、「笑いは真剣に取り組んでいるときの表情」がオデーサの文化の特徴のひとつだとすると(日本ではおそらく逆でしょう)、それはウクライーナの土地の先住者スキュタイの王族であった BC6 世紀初め頃のアナカルシスが、「真剣になることができるために遊ぶのが本来の姿だ」といったことを思い出させます。「連続的に一生懸命仕事ができるためには、活動のための休息が必要だ」とかれはいつているからです。そしてこれも、「言語－身体的なヘクシス」の特徴のひとつになります。

第二に「倫理的あるいは道徳的なヘクシス」があります。

「倫理的なヘクシス」は、たとえば「勇気」「義憤」とか「節制」「節度」とか「温厚」「穏和」とか「正義感」あるいは「気前の良さ」とか「度量の大きさ」「志の高さ」とか「親愛なる（「よき友」の）態度」*と言われる、「人間の性格(=人柄)」あるいは「性格の徳＝卓越性」(virtue of character)に関わるものです。

* これは friendliness（よき友の態度）であって、friendship（友人関係＝友愛）そのものではありません。アリストテレスは、「倫理的な卓越性」にもとづく友愛は、友愛そのものであり、持続的なものだと言っています（同上、1164a、p. 13）。これは、「都市の美学」の原則の一つである「友愛における均等性」(equality in friendship)を示しています。「都市の美学」のもう一つの原則は、「正義における均等性」(equality in justice)です。「友愛における均等性」では「量における均等性」が優越し、一方、「正義における均等性」においては「価値における均等性」が優越します。さらに、「^{ディカイオシヤネー}正義」(justice)に関わるものとして「^{エビエイケイア}公正」(equity)を、「^{ト・ディカイオン}正しさ」(the just)に関係するものとして「^{イ・ケイタビ}適正さ・^{イ・ケイタビ}適切さ」(the equitable)あるいは人間の行為、芸術諸作品、地域や都市における「品位（あるいは品格）」「高潔」(the decent)を付け加えてもよいかもしれません。そして、この「適正さ」とか「品位」と呼ばれるものは、「より良き正しさ」であり、「適正で品位（＝品格）のある人」(the equitable and decent person)とは、法律が自分に有利であっても過小に取るという

「選択」をするたちの人のことです。こうした人の
「^{ヘクシス・プロアイレタイケー}選択の性向」を、わたしはここで、「^{エビエイケイア}公平・公正」と呼んで
みたいと思います。これが当該社会において、^{プラークシス}行為の実践をめぐる
社会的な評価以上に「法律の補訂機能」(rectification of law)をも
つことがあれば、法律家の専門用語にすでにあるように、それは
「^{エビエイケイア}衡平」と呼ぶのが相応しいでしょう。これは文字通り、
「性向」(身体的ヘクシス)の一類型であり、「倫理的な卓越
性」の準類型であると考えてよいと思います。

第三に、「知性的なヘクシス」は、たとえば「^{ソビイア}知恵」とか
「^{ノエ}思慮」「^{シニシス}見識」とか「^{シネーシス}理解する力」とか「^{エビデクシオテース}機転が利く」とか、
あるいは「^{テクネー}技術」とか「^{エビデステーメ}科学的知識・学問」とか

「^{ノエ}直観的に鋭く物事を把握する力」とか「^{アレ}真実を持続的に探究する力」な
ど、文字通り「人間の知性的判断力あるいは思考力」あるいは
「思考の徳＝卓越性」(virtue of thought)に関するものです。

ちなみに、「生を共に(シュゼーン)する」ことの「人間的な意味」は、
「ロゴス(公正な論理的秩序)とディアノイア(知的認識)を共にする」とこ
ろにあります。そこから、「善と悪」「正と不正」の感覚が引き出されてきま
す。

「文化的ヘクシス」の第四の次元は、すでに述べたように「美
的・感覚的なヘクシス」です。これは [ドイツの哲学者イマニュ
エル・カント](#) も指摘するように、「知性的なヘクシス(=判断
力・思考力、具体的には知恵、直観力、学問、思慮、技術な
ど)」というよりも、むしろ「共通感覚」(sensus communis)に近
いものだと考えられます(たとえば、『判断力批判』岩波文

庫、上巻、p. 235を参照)。現代社会においては、SNSの利用によって、この次元のヘクシスにおける「選択の性向」(とその持続性)に大きな変化が見られます。この「身体性向の変容」(changing disposition or state of bodily hexis)が、[フランスの社会学者 ミシェル・マフエゾリ](#)がいう「現代の部族」(les tribus, urban tribes)を創出しており、かれが強調する postmodernité (脱近代の文化的特徴)の正体でもあります。

他方、「生物学的ヘクシス」は、一般には「^{ヒュギエイア}健康」や「身体のリズム」と結びついています。「健康」について、アリストテレスは、「医学が健康をつくりだすごとくではなく、健康という<ヘクシス>(=性向)が健康をつくりだすごとき仕方」を問題にしています(『ニコマコス倫理学』第6巻第12章、1144a)。そして、医学における「健康的なるもの」(タ・ヒュギエイナ)は、体育における「強壯的なるもの」(タ・エウエクティカ)同様、「^{メソテ}中的なもの」(the mean)を意味するのだとも述べています。この場合、「中的なもの」を目指す「健康」や「強壯」あるいは「身体的=肉体的な美しさ」などの「^{アレテ}卓越性」は、「身体的なヘクシス」なのです(1143b)。「マドレーヌのにおいと紅茶の香り」で少年時代の休暇滞在の詳細をふと思い出す「プルースト効果」も、この身体的ヘクシスの機能だといってよいでしょうし(マルセル・プルースト『失われた時を求めて』を参照)、

二度目の海外滞在で一度目には全く身につかなかったと思っていた言語（外国語）が、急に思い出されて使えるようになるという現象も、「言語的ヘクシス」と「生物学的ヘクシス」の共同関係^{コイノニア}によって可能になっていると思われます。

「身体の自然的構成」（岩永、2008、pp.222-223）とも呼べるこのヘクシスは、人間の身体の外にある「自然環境」だけではなく、その加工物としての「都市環境」との関係も示唆しています。ここには、「社会的に構造化された身体的および生物学的ヘクシス」としての「都市環境」という問題領域が横たわっています。この論点は、2017年10月20日に、ウクライーナ国立キーウ大学社会学部大学院の「社会学理論」の講義で論じたことがあります ([Hexis, or on the Urban Milieu as a Structured Form of Bodily Habitus: A Methodological Question](#))。

フランスの哲学者であり、社会学者でもあるアンリ・ルフェーヴルは、伝統的で農民的な「身体的ヘクシス」からの解放に芸術の役割を見ましたが、その着眼および研究方法は「身体のリズム分析」として残されました。パリ大学ナンテール校で一時ルフェーヴルの同僚であったピエール・ブルデューは、ルフェーヴルがシチュアショニスト的な観点から身体的な習慣に解放の希望を見出したところに、未来への解放を拘束し再生産する原理として「ハビトゥス」を見出しました。

ところで、精神＝心の活動のなかで、「行為^{ブラークシス}の実践」(action)や「真理^{アレタイア}の認識」(attainment of truth)を司るものが三つあります。「感覚^{アイステシス}」(sensation, sense-perception)、「直観^メ知としての知性^{ノス}」

(intuitive understanding)、そして「欲求」(desire)^{オレクシス}です。しかし、「感覚」は、いかなる「行為実践の端緒」^{アルゲー}にもなりません。「欲求」の領域における「追求」^{デイオークシス}(pursuit)と「回避」^{ブシューゲー}(avoidance)は、「知性的認識」^{デイアナノイア}(intellect)の領域における「肯定」^{カタファシス}(affirmation)と「否定」^{アポファシス}(denial)に対応しています。

「倫理的あるいは道徳的な卓越性」(ethical or moral virtue, virtue of character)と呼ばれるものは、「選択にかかわる精神＝心の状態」^(a disposition or state of the mind in regard to choice and decision)であり、そして「選択」とは、すでに述べたように「熟慮された欲求」^(deliberate desire)なのです。そして、人間の「人間的によい

はたらき」の実現には、「思慮」^{プロネーシス}と「倫理的卓越性」^{エーティケー・アレテー}が重要な役割を果たします。「思慮」あるいは「見識」と呼ばれるものは、人間の行為を目標に向かって正しく働かせる機能を持っています。たとえば、「才能」^{デイノテース}と呼ばれる能力がありますが、これは「与えられた目標へ導くべき諸般のことを行なって首尾よくこの目標に到達しうる能力」(同上、1144a、pp. 35-36)のことです。しかし、もし目標が立派でよい場合には、「才能」は賞賛されるべき能力になりますが、逆にその目標が悪きものであれば、それは「邪知」^{バスルギア}にすぎません。よい意味で「才能」がある人も、「邪知」のみ持っている人も、ともに「如才ない」と言われる所以です。ここにおいて、「思慮」は、「倫理的卓越

性」を導くうえでも、重要な役割を果たします。それは、「人間の善と悪をめぐる実践に関しての、岩のように永遠に、ことわりを具えて真を治めるヘクシス（状態＝行動性向）」(ἐξῆν ἀληθῆ μετὰ λόγου πρακτικὴν περὶ τὰ ἀνθρώπων ἀγαθὰ καὶ κακά, a disposition grasping the truth, involving reason, concerned with action in relation to things that are good and bad for human beings)なのです。

そして、「節制」のことを、古典ギリシア語でソープロシュネーと呼ぶのにも理由があります。「節制」とは、「^{プロネーシス}思慮を^{ソーズイン}保全するもの」という意味だからです。「節制」を保全するような判断が、「思慮」と呼ばれているわけです。（同上、1140b、pp.12-13）

「選択」と「思慮」の関係についていえば、「思慮」によって目的が正しく設定され、「選択」によって^{テロース}目的へのいろいろな正しい手立てに到達できる、ということになります(H.N., 1145a)。

「ヘクシスの社会学」の視座や分析領域に関心のあるひとは、拙著『[グローバルゼーション、市民権、都市－ヘクシスの社会学－](#)』（春風社、2013改訂版）を直接手にとってもらえればと思います。また、「ヘクシスの社会学」の新しい応用例としては、英語論文 [\(2016\)Globalization, Citizenship, and Rights to the City: Towards a Sociology of Euro-Asian Continental Integration](#) を参照してください。ここでは、ハンナ・アーレントがいう「現われの空間的な諸実践」(spatial practices of appearance)としての「ヘクシス」を、「経済社会および市民社会のリスケリング」(rescaling of economic and civil society)の問題として扱っています。

「グローバル社会学」あるいは「マクロ社会学」の領域で、この「分業と所有の社会学」を、プラトン、アリストテレス、A・スミス、コント、ジンメル、デュルケーム、ヴェーバー、パレート、マルクス、[高田保馬](#)らの仕事に導かれてわたしは構想しているのですが、この10年のあいだに、分業をシステムに、所有を行為または社会的行為に置き換えてもいいのではないかと考えるようになりました。分業の問題は、これまで基本的には「社会的な分割労働」(social division of labor/division du travail social)の問題であると考えてきましたが、アイゼンシュタットなどの著作を参考にしながら社会システム論的な思考にきりかえることも可能なのではないかといまは考えています。一方、所有の問題をわたしは、日本における社会思想史研究の蓄積を前提にこれまで「関係行為」(より厳密には、sich verhalten gegenüber)の問題として考えてきましたが、これも現在では、ブラウやホーマンズなどの仕事を参考にしながら社会的交換(あるいは分与 μετάδοσις)および経済的交換(αλλαγές)の問題、あるいはD・ウィラーが主張するような「ネットワーク交換」の問題として取り扱うことができるのではないかと考えています。したがって、わたしが構想してきた「分業と所有の社会学」は、現在では「社会システムと交換の社会学」とタイトルを変えることが可能であるように思われます。

ἀπλοῦς ὁ τῆς ἀληθείας ἐστὶν λόγος.

「真理の言葉は単純である。」

（古代ギリシアの文献）

ヘクシスの社会学のさらなる展開に関して、もう少しヒントと簡単な分析事例を紹介しておきましょう。

ブルデューは、言語を「身体技法」(technique du corps)であるといい、言語的能力、とりわけ音韻論的言語能力は社会的な間柄と世界との関係がそこに表現される「身体的ヘクシス」(l'hexis corporelle)の一部である*と述べています（稲賀繁美訳『話すということ』藤原書店、1993、102～7、151）。喋り方や食べ方や飲み方や笑い方にともなう口のさまざまな包括的用法（そこには「上品である」「下品である」「大人の／成熟した」「子供っぽい」「洗練された」「田舎っぽい」「雄々しい／男らしい」「女性らしい」といった、文化的な諸要素をまとめあげる「評価」や「説明」がついてまわります）について、かれはとくにフィジカルな側面に着目して、ヘクシスという言葉を使用しています。このブルデュー的な「身体的ヘクシス」という言葉の使用法にしたがった新しい分析事例としては、[\(2018\)「ウクライーナ通信（４）ウクライーナの農村－フィールドワークから－」](#)を参照してください。

* この「音韻論的言語能力」としての「身体的ヘクシス（＝身体の性向）」の新しい分析事例としては、短い文章ですが、[\(2018\)「ウクライーナ通信（３）ウクライーナの言葉とその表現－音韻論的二重言語問題について－」](#)も参照してください。

「身体的ヘクシス」は、繰り返しになりますが、「生物学的なヘクシス」と「文化的なヘクシス」とに分けられます。そし

て、「^{ソーマ}身体」の「文化的ヘクシス」は（すでに述べたように、ここには「方言を話す」「標準語を話す」などの言語的ヘクシスなどがふくまれます）、その「生物学的ヘクシス」同様、つねに「卓越性」と「劣等性」の争いの焦点になっています。この「卓越性」と「劣等性」の争い=闘争が、市民社会の緊張の核心部分にあります。そして、「卓越性」と「劣等性」の争い=闘争は<二つの次元>をもっており、ひとつは

「^{ディアノエティック・アレテ}知性的卓越性」と呼ばれるものであり、もうひとつは

「^{エーテイケー・アレテ}倫理的卓越性」と呼ばれるものです。この<二つの身体的な卓越性（＝劣等性）>の^{コイノニア}共同関係（あるいは共犯関係）によって、「文化的身体」（あるいは「文化的ヘクシス」）と呼ばれうるものが成立しています。

ちなみに、フランスの社会学者ピール・ブルデューのハビトゥス論は、古代ギリシア哲学の文脈でいえば、以上のような問題に切り込む分析道具にもなっているのです。ただ、ブルデューは、「身体的ヘクシスと言語的ハビトゥス」という^{専門的}用語を使用しています。

διο ρίζεται δὲ καὶ ἡ ἀρετὴ κατὰ τὴν διαφορὰν ταύτην. λέγο μεν γὰρ αὐτῶν τὰς μὲν διανοητικὰς τὰς δὲ ἠθικὰς, σοφίαν μὲν καὶ σύνεσιν καὶ φρόνησιν διανοητικὰς, ἐλευθεριότητα δὲ καὶ σωφροσύνην ἠθικὰς. λέγοντες γὰρ περὶ τοῦ ἥθους οὐ λέγο μεν ὅτι σοφὸς ἢ συνετὸς ἀλλ' ὅτι πρᾶος ἢ σώφρων. ἐπαινοῦ μεν δὲ καὶ τὸν σοφὸν κατὰ τὴν ἔξιν, τῶν ἔξεων δὲ τὰς ἐπαινετὰς ἀρετὰς λέγομεν.

(Αριστοτέλης, Ηθικα Νικομαχεια, 1103a, 4-10, ed., by H. Rackham)

「卓越性もまた、魂の以上のような区分に基づいて区別される。すなわち、われわれは、卓越性のうち若干のものを『知性的な卓越性』と呼び、若干のものを『倫理的な卓越性』と呼ぶ。知恵とか^{ソフィア}理解力とか^{シユネーシス}思慮^{プロネーシス}は知性的な卓越性に、^{エレウテリオテース}気前のよさとか^{ソープロシュネー}節制とかは倫理的な卓越性に属するのである。事実、われわれはある人の^{チーテス}性格について語るときには、知恵があるとか理解する力があるとかとはいわずに、^{プラオアス}温厚であるとか^{ソプロス}節制的であるという。だが、われわれが賞讃するのはこれだけでなく、たとえば、知恵ある人をもわれわれは、やはりこの^{ヘクシス}性向に基づいて賞讃する。そして、賞賛すべき諸々の性向を、われわれは卓越性（あるいは徳）と呼んでいるのである。」（強調は原文ともに引用者）

Διτῆς δὴ τῆς ἀρετῆς οὐσῆς, τῆς μὲν διανοητικῆς τῆς δὲ ἠθικῆς, ἡ μὲν διανοητικὴ τὸ πλεῖον ἐκ διδασκαλίας ἔχει καὶ τὴν γένεσιν καὶ τὴν αὐξῆσιν, διόπερ ἐμπειρίας δεῖται καὶ χρόνου. ἡ δ' ἠθικὴ ἐξ ἔθους περιγίνεται, ὅθεν καὶ τοῦνομα ἔσχηκε μικρὸν παρεγκλῖνον ἀπὸ τοῦ ἔθους.

(H.N., 1103a, 14-18)

「われわれがみたように卓越性には二通りあり、『知性的な卓越性』と『倫理的な卓越性』がそれである。知性的な卓越性はたいていは^{ディダスカリーア}教育によって生じ成長するのであり、したがって経験と時間を要する。一方、倫理的な卓越性は^{エトス}習慣に基づいていて、実際、『習慣』という言葉からちょっと派生・転化した言葉にそれはなっている。」（強調は原文ともに引用者）*

* 「習慣」 (エトス、ἔθος, ethos) という言葉から、「倫理的な卓越性」 (エーティケー・アレテー、moral or ethical virtue) という言葉が派生しているということをいっています。同様の文脈で、マックス・ヴェーバー以来社会学者に流行りの「エートス」 (ἦθος, 倫理的な性格) という言葉も、じつは「エトス」 (習慣) から派生した言葉です。古典ギリシア語の文脈では、語源的には、文字通り「エトス」 (習慣) から「エートス」 (性格) が生まれます。ちなみに、H. Rackham は、ディアノエーティケー・アレテーを "intellectual virtue"、エーティケー・アレテーを "moral or ethical virtue" と英訳していますが (ibid, p.71)、T. Irwin は、前者を "virtue of thought (思考の徳)"、後者を "virtue of character (性格の徳)" と訳しています (T. Irwin, 1985, Nicomachean Ethics, Hackett Publishing, p.33)。両者とも、「エトス」には、["habit"](#) という語を当てています。

また、アリストテレスは『政治学』の中で、つぎのようにもいっています。

μὴν ἀγαθοὶ γε καὶ σπουδαῖοι γίνονται διὰ τριῶν. τὰ τρία δὲ ταῦτά ἐστι φύσις ἔθος λόγος.

(Πολιτικῶν, 1332a, 39-40)

There are three things which make men good and excellent; these are nature, habit, reason.

(by B. Jowett, The Complete Works of Aristotle, Volume Two, Princeton University Press, p.2114)

「人間は三つのものによって善くて有徳な者になる。その三つとは、生まれつきと習慣と公正な論理的秩序である。」そして、人間は「一方で慣れることによって学び、他方で、教わることによって学ぶ」(τὰ μὲν γὰρ θιζόμενοι μανθάνουσι, τὰ δ' ἀκούοντες. ibid, 1332b, 10-11)ともいっています。そして、ここに「教育の仕事」(τό δὲ λοιπὸν ἔργον ἤδη παιδείας)(ibid, 1332b, 10)があるとつけくわえています。(以上、強調は原文ともに引用者)

残念なことに、日本のブルデュー紹介者はだれも、かれのこれらの言葉（ヘクシス *ἕξις* とハビトゥス *habitus*）の使用法に着目していません。本来であれば古典ギリシア語のヘクシスとラテン語のハビトゥスという言葉がひとつの社会的なまなざしのなかに関連づけられていることじたい、ある意味不思議なことであり、また探究に値する独特な出来事すなわち特異な社会界における社会現象であるはずです**。

**ラテン語の言葉「ハビトゥス」を中心に古典ギリシア語の言葉「ヘクシス」を併用するブルデューの議論の特徴に関しては、短い解説ですが、著書・論文（５）にあるコース演習テキスト（2018）注（5）および前掲英語論文（2016）Notes（1）（2）を参照してください。また、Pascal Durand の解説 [Hexis](#) も参照。

τῇ μέσῃ δ' ἔξει οἰκεῖον καὶ ἡ ἐπιδεξιότης ἐστίν.

(H.N., 1128a, 17-18)

("The middle disposition is further characterized by the quality of tact, ...," trans. by H. Rackham, 1934, Harvard University Press (Loeb), p. 247)("Dexterity is also proper to the intermediate state." trans. by T. Irwin, 1985, Hackett Publishing, p. 113)

「^{エビデクシオテース}機転が利くということも、^{ヘクシス}中的な性向である。」

これは、人間関係における「中的な性向」のひとつですが、とりわけ対人関係を指向する「性向」には三つあり、これらにはいずれも名前がついていません。ひとつは、「機嫌とり」でなく「不愉快でうるさいひと」でもない「中的な性向」で、これは「^{フィリア}親愛」そのものではありませんが、それに最もよく似ています。それは「^{フィロス}よき友」という言葉で表現出来るひとのことです(『ニコマコス倫理学』第4巻第6章)。もうひとつは、「虚飾」と「卑下」の間の「中的な性向」で、この「性向」は、「^{アレーテ}真実に^{ヘミフ}向き合うひと」を表しています。それは外聞や利益を求めて嘘をつく「嘘つき」のことではなく、また物事を過少に語る「卑下するひと」でもありません。どちらかといえば、それは「嘘つき」の正反対の「性向」であり、それは「真実を求めるひと」のことであり、「真を治めるひと」のことです(同第7章)。

三つ目に、先の引用にあげた「機転が利くひと」という「性向」があり、それは「道化者」でなく「野暮で堅苦しいひと」でもない、「中的な性向」のことです。それは、「時宜を心得ている」とか、「わきまえがある」とか、「機知に富んでいる」とか表現出来るひとを意味しています(同第8章)。

以上、三つの「中的な性向」は、とりわけミクロな社会的相互行為や言語－発話行為の場とその質を決定する重要な基準を表現しています。

最後に、社会学は現実の人間や社会を対象にする学問であり、経験科学です。しかし、社会学は、自分に固有の^{アプローチ}観点や研究対象をもたずに、むやみやたらと探究の対象を広げていく学問ではありません。この点、強調しておきたいと思います。

κάτοπτρον εἶδους χαλκός ἐστ', οἶνος δὲ νοῦ. Αἰσχύλος

「青銅は姿の鏡であり、ぶどう酒は心の鏡である。」

(アイスキュロス)

(2) 先生が専攻されている、あるいは、この大学で学生に教えられている社会学とはどのような学問ですか。

わたしの専攻は「地域社会論」です。対象となる地域社会には都市と農村の両方がふくまれます。旧いカリキュラムでは「都市社

会学」(urban sociology)と「農村社会学」(rural sociology)の別々であったものを、ひとつの科目に統合してできた新しい学問領域です。現代の地域社会は都市と農村に単純に区分することができない状況にあること、都市と農村の関連それ自体が新たな問題として浮かびあがってきていること、また国民国家や地方自治体の諸施策（ふるくは全国総合開発計画から近年の「[地域おこし協力隊](#)」や[TPP](#)、[欧州連合とのEPA](#)、[RCEP](#)に至るまで）が地域社会（^{グローバル・シティ}世界都市、大都市、中小都市、農村、中山間地域、あるいは発展途上国や新興国の^{メガシティ}巨大都市など）にどのようなインパクトを与えているのかに関する研究が重要になってきていることなどからその必要性が認識されてきたのが、この「地域社会論」という学問領域です。「地域社会学」と呼ぶこともできます。英語では通常 regional and community studies と表現されますが、わたし自身は地域社会の歴史的な変化を都市現象の拡大と捉えていますので、urban and community studies と自分の専攻を表現するようにしています。コミュニティの語は地域社会と訳されたり共同体と訳されたりしますが、後者の意味でコミュニティの形成を考えるばあいには、欧州連合などの「グローバルな地域的共同体の形成」や「ネットワーク・コミュニティの形成」なども視野にはいってきます。

ところで、メリメの小説『カルメン』のなかに、ユーラシア大陸の西側ジブラルタルに至るまでの地域社会について、つぎのような文章があります。

L'Espagne est un des pays où se trouvent aujourd'hui, en plus grand nombre encore, ces nomades dispersés dans toute l'Europe, et connus sous les noms de Bohémiens, Gitanos, Gypsies, Zigeuner, etc. La plupart demeurent, ou plutôt mènent une vie errante dans les provinces du Sud et de l'Est, en [Andalousie](#), en [Estramadure](#), dans le royaume de [Murcie](#); il y en a beaucoup en [Catalogne](#). ces derniers passent souvent en France. On en rencontre dans toutes nos foires du Midi. D'ordinaire, les hommes exercent les métiers de maquignon, de vétérinaire et de tondeur de mulets; ils y joignent l'industrie de raccommoder les poêlons et les instruments de cuivre, sans parler de la contrebande et autres pratiques illicites. Les femmes disent la bonne aventure, mendient et vendent toutes sortes de drogues innocentes ou non.

(P. Mérimée, 1966, Carmen, Bordas, p.105)

「ボヘミアン、ヒタノス、ジプシー、チゴイネル、その他さまざまな名で知られ、全ヨーロッパに散らばっているあの流浪の民が、今日なおもっとも多くいる国のひとつがスペインだ。かれらの大部分は、南部および東部の諸地方、すなわちアンダルシア、ムルシア王国のエストラマドラに住んでいるというよりは、そこで流浪の生活を送っている。カタロニアにもやはり大勢いる。この連中はときどき、フランス国内へもはいりこんでくる。フランスの南部地方に市が立つと、かれらの姿が必ず見られる。普通、男たちは博労や、獣医や、騾馬の毛刈りを職業にしている。鋳掛屋もかれらの職業の一つだ。密輸や不正行為もむろんやっている。女たちは占いをしたり、物乞いをしたり有害無害さまざまな薬品を販売したりしてもいる。」（メリメ（堀口大學訳）『カルメン』新潮文庫、2006年、p.113、ルビはママ。強調は原文ともに引用者。）

ここにでてくるエストラマドラ*は、いまでも、スペインでもっとも貧しい地域のひとつです。なぜそうなのでしょう。メリメの『カルメン』から、時間はずいぶんたっています。そのことについて考えることも、地域社会論という講義の主要な課題になっています。理論的にいえば（学問をこころざすひとは、この言葉に注意してください。対になっている言葉＝思考は、現実の問題としては、です）問題になっているのは、「都市と農村のあいだの不均等発展」といわれる社会的現実です。同型の問題は、たとえば首都圏と東北地方のあいだにも、大阪神戸京都圏と瀬戸内や山陰地方のあいだにも、名古屋大都市圏と岐阜、紀伊半島、信州、駿河地域とのあいだにも、見られます。さらには、沖縄本島と宮古諸島、八重山諸島とのあいだにも、見られる関係です。

* "Estremadura"（標準スペイン語、すなわちカスティリア地方の言葉（＝カスティジャーノ）でエストレマドゥーラ。『カルメン』の原文は、フランス語で、"Estramadure"（発音は「エストラマデュール」）となっています。堀口大學は、この "...dans les provinces du Sud et de l'Est, en Andalousie, en Estramadure, dans le royaume de Murcie..."

（斜字体の強調は引用者によるもの）を、「・・・南部および東部の諸地方、すなわちアンダルシア、ムルシア王国のエストラマドラ・・・」と、おそらく誤訳しています。エストレマドゥーラとムルシア王国は、スペイン南部の東と西のそれぞれ別の地域

で、メリメの原文のフランス語も、そう読むのが正しいと思われます。工藤庸子の新しい訳では、この部分は「・・・南から東にかけての地方、アンダルシア、エストレマドゥーラ、ムルシア王国・・・」と、訳されています（メリメ『カルメン』新書館、1997年、p.140）。

一方、フリードリッヒ・ニーチェは、「大都市」(Großstadt)* について、『ツァラトゥストラはかく語りき』のなかでつぎのように書いています。「押しつけがましい者たち、恥知らずの者たち、文筆と絶叫で訴え続ける者たち、熱しすぎた野心家たちの都市・・・/ここでは、一切の腐りかけたもの、いかがわしいもの、みだらなもの、陰気なもの、熱しすぎたもの、潰瘍^{かいよう}だらけのもの、謀反^{むほん}めいたものが、ごたまぜになって化膿^{かのう}している、・・・/この大都市につばを吐きかけ、そして引き返せ！(Speie auf die große Stadt und kehre um!）」（吉沢伝次郎訳『ツァラトゥストラ』ちくま学芸文庫、下巻、ニーチェ全集10巻、1993年、pp.63-64、ルビはママ。強調は原文ともに引用者）と。

*ドイツ人は、比較的小さな都市に住むことに慣れており、現代でも「大都市」の定義は10万人以上となっています。ドイツの首都ベルリンの人口は、単純に自治体間で比較すると、横浜市の368万人(2022年現在)よりも少ない357万人(同前)です。大都市圏でみたばあい、横浜市は東京大都市圏3,800万人の一部を構成していますが、ベルリンは600万人の独立した大都市圏となっています。ちなみに、ドイツ第2位のハンブルクの人口は都市規模で182万人(同前)で、日本第4位の札幌196万人(同前)よりもやや小さい大都市になります。また、ジャン＝

ジャック・ルソーは、「壁や街路や犯罪しか眼にしない都会の住民たちが、どうして信仰をもちえないのか、わたしにはよくわかる (Je comprends comment les habitants des villes , qui ne voient que des murs, des rues, et des crimes, ont peu de foi)」 (Jean-Jacque Rousseau, 2010, Les Confessions, Champion Classiques, p. 829. 桑原武夫訳『告白』岩波文庫、下巻、1966年、p. 232) と書いています*。「都市とはなにか」あるいは「<都市的なもの>とはなにか」についての考察も、地域社会論の主テーマになっています。

*パリの人口は、自治体規模で224万人（2011年現在）、大都市圏でみると1,229万人（同前）です。ルソー(1712-1778)の時代には、60万人ぐらいの「大都市」でした。ちなみに、現在の世界の都市圏人口第1位は東京大都市圏3,773万人ですが、2位はインドネシアのジャカルタ大都市圏で3,376万人、第3位はインドのデリー大都市圏で3,223万人（ともに2022年7月現在）となっています。パリ大都市圏は25位以内にもはいっていません

([Source: Demographia World Urban Areas, 2022.7](#))。それでもパリは、ロンドンやニューヨークとともに、大都市であることには変わりありません。しかし、現代の大都市としては、アゼルバイジャンのバクー237万人(2021年現在)やマレーシアのクアラルンプール891万人(2022年現在)の方が、あきらかに勢いがあり、超近代的な大都市の外観を示しています。ドバイや上海や成都も同様です。

なお、「都市的なるもの」の現代的意味に関しては、拙稿「ユーラシア大陸統合の社会学—都市への権利と都市的なるものの未来構想—」（明治学院大学社会学部附属研究所『年報』第44号、2014年所収）を参照してください。人間個人の自然との向き合いが、工業化および情報化・グローバル化された都市環境においてどのような結果＝作品を産み出すのかについて、考察しています。

ちなみに、アリストテレスは「都市的なるもの」について、つぎのように考察しています。

διόπερ τὸ ἴσον τὸ ἀντιπεπονθὸς σώζει τὰς πόλεις, ὥσπερ ἐν τοῖς ἠθικοῖς εἴρηται πρότερον. ἐπεὶ καὶ ἐν τοῖς ἐλευθέροις καὶ ἴσοις ἀνάγκη τοῦτ' εἶναι.

(Πολιτικῶν, 1261a, 31-34)

("Hence reciprocal equality is the preservative of cities, as has been said before in Ethics. For even among the free and equal this principle must necessarily obtain, ...," trans. by H Rackham, H,1932, Harvard University Press (Loeb), p. 73)

That is why the principle of reciprocity, as I have already remarked in the Ethics, is the salvation of states. Even among freemen and equals this is a principle which must be maintained.

(by B. Jowett, The Complete Works of Aristotle, Volume Two, Princeton University Press, p. 2001)

Por eso precisamente la igualdad en la reciprocidad es la salvaguardia de las ciudades, como ha quedado ya dicho en nuestra Ética. Aun entre los libres y de igual clase es necesario que sea de este modo.

(by Carlos García Gual y Aurelio Pérez Jiménez, 1986, Política, Alianza editorial, p. 93)

「したがって、すでに『倫理学』でも述べられたように、都市を維持するものは<応報的・相互給付的な均しさ>である。なぜなら、自由で平等な人びとの間でさえ、これはなくてはならないものであるから。」（強調は原文ともに引用者）

「^{アン}テ^イベ^ボント^ス」（τὸ ἀντιπεπονθός）* に関しては、つぎのようにも述べています。

* 「^{アン}テ^イベ^ボント^ス」や「^メタ^タド^シ」（社会的交換=分与）に関しては、ハンガリー出身の経済学者カール・ポランニーの、「市場経済の誕生」と「アリストテレスの社会学」をめぐる論考が有意義な議論を提供しています。タルコット・パーソンズやニール・スメルサーの議論を引きながら、かれはアリストテレスの議論のなかに、じつに リアルな社会学的視点を「発見」しています (Karl Polanyi, Aristotle Discovers the Economy, in K. Polanyi, C. M. Arensberg, and H. W. Pearson (eds.), 1971, Trade and Market in the Early Empires, A Gateway Edition, pp. 78-80)。しかし、ポランニーはここで、『ニコマコス倫理学』や『政治学』における古典ギリシア語の「メタドシ

ス」(μετάδοσις)という言葉、近代的な意味での「市場交換」("exchange")と理解してしまうことに注意を促しています。「メタドシス」とは「メタ(分け前)」を「ディドーミ(δίδωμι=与える)」すること、現代英語では "giving a share" であり、^{ヨイノニア}共同体 (=自分) にとって余剰なものを「分有」することなのだと述べています。じつは、それは古典ギリシア語の「メテケイン=メタ・エケイン(=分有する)」(μετέχειν)のことでもあり、「ヘクシス」(=持ち前)と「メタ」(=ともに)にあるものであり、「ヘクシス」が分け持たれた「メタ」(=後の)の状態なのです。

ポランニーは、「宗教的なお祭り」であれ、「儀式な会食」であれ、「その他の公共事業」であれ、「食べ物の共同の蓄え」を「分け与える」こと、それが「メタドシス」に特有の意味であると注意を促しています(ibid., p.93)。そして、^{ヨイノニア}「共同体」のなかで「公正な価格」(just price)というものは、「すべての人間の共同体の本質である互惠性(reciprocity)のなかに表現された

「^ビ友人^イ関係」(=^リ友^ア愛)の欲求から出てくる」ものであるとも述べています(ibid., p.80)。それは、「比例的な互惠性を表現する行為実践」(acts of proportionate reciprocity)でもあります。アリストテレスの古典ギリシア語では、「アンティペポントス・カタ・アナログイアン」(=比例に従った応報・相互給付)のことです。

「^{ミューチュアル・シェアリング}相互給付としての市場」と呼んでもよいかもしれません。そして、日本の農家の主婦たちが寄り合ってワイワイと開催する

「朝市」とそこで販売される野菜等の価格とは、まさにこのようにして形成されてくるものだと考えられます。そこに表現されているものは、「友人関係」（＝友愛）における「均等＝平等性」（equality in friendship）にほかなりません。

ポランニーの社会学的な議論に関しては、[若桑みどり \(2009\)](#) [「カール・ポランニーの『経済社会学』の誕生」](#)を参照。

Δοκεῖ δέ τισι καὶ τὸ ἀντιπεπονθὸς εἶναι ἀπλῶς δίκαιον, ... ὠρίζοντ γὰρ ἀπλῶς τὸ δίκαιον τὸ ἀντιπεπονθὸς ἄλλῳ.

(H .N ., 1132b, 21-22)

The view is also held by some that simple Reciprocity is Justice.

(by H. Rackham, p. 279)

Some think that reciprocity is without qualification just.

(by W. D. Ross, revised by J. O. Urmson, The Complete Works of Aristotle, Volume Two, Princeton University Press, p. 1787)

Paréceles a algunos que también la reciprocidad es justa en sentido absoluto.

(by José Luis Calvo Martínez, 2001, Ética a Nicómaco, Alianza editorial, p. 187)

Einige meinen aber, auch die Wiedervergeltung sei schlechthin gerecht.

(by Gernot Krapinger, 2017, Nikomachische Ethik, Reclam, S. 130)

「だが、一部の**人びと**にあっては、『**応報を得ている**』ということが、そのまま、**正しさ**ということにほかならない。・・・かれらは、正しさとはお互いに対して**応報を得たこと**の意味であると単純に規定しているのである。」

(アリストテレス、高田三郎訳『ニコマコス倫理学』岩波文庫、上巻、1971年、p.185。強調は原文ともに引用者。)

ἀλλ' ἐν μὲν τὰς κοινωνίαις ταῖς ἀλλακτικαῖς συνέχει τὸ τοιοῦτον δίκαιον, τὸ ἀντιπεπονθός, κατ' ἀναλογίαν καὶ μὴ κατ' ἰσότητα.

(ibid, 1132b, 32-33)

「しかしながら、**経済的交換の共同体**（あるいは**共同関係**）においては、やはりこのような**正しさ**がその楔となっていることはあらそえない。もちろんそれは、比例に基づく**応報的・相互給付的な**正しさであって、単なる均等性のそれにそくしてではない・・・。」

（同上、上巻、p. 186。原文ともに強調は引用者。また、一部訳を変えてある。）

Ferner vernahm ich von ihr, daß die Weinbauern, die am wohlhabendsten scheinen, sich am übelsten befinden, denn sie sind in den Händen der städtischen Handelsleute, die ihnen bei schlechten Jahren den Lebensunterhalt vorschießen, und bei guten den Wein um ein geringes an sich nehmen. Doch das ist überall dasselbe.

(Johann Wolfgang Goethe, 1992, Italienische Reise, Carl Hanser Verlag, S. 40 Z. 29-34)

「いちばん裕福そうに見えるぶどう栽培者がいちばん困っているのである。それはかれらが都会の商人に急所を抑えられているからである。都会の商人は凶作の年にはかれらに生活費を前貸ししてやり、豊作になると二束三文でぶどう酒を捲きあげるのだ。でも、こんなことはどこへ行っても同じことである。」
（ゲーテ、相良守峯訳『イタリア紀行』岩波文庫、上巻、1960年、p. 58）

「学んだことは書きとめよ。」（ダンテ）

(3) 1～2年次で読んで欲しい本

1. 『イリアス』（ホメロス 岩波文庫 上・下巻 1992）

「パトロクロスの葬送競技」を謡った第二三巻は、われわれの社会にたいする示唆に富んでいる。そこにアゴーン（ἀγών）の社会的な意義＊をみいだすのも、ゲーテとシラーの対照あるいは古典的なものとロマンティックなものの対照をみいだすのも、われわれの自由である。最初は、散文訳の松平訳からはいるのがよいだろう。

＊ グローバルな次元での "アゴーンの政治" の重要さが指摘されている。それは異質なアイデンティティをもつ「他者」がいなければ「自己」のアイデンティティも成立しないという考え方の表明である。「対話」も、相互に異質なものだからこそ成り立つという考え方の表明でもある。この意味で「対話」は「闘^ア技^ゴ=競^テ技^イ」である。（山田竜作「グローバル・シティズンシップの可能性」藤原孝・山田竜作編『シティズンシップ論の射程』日本経済評論社、2010年、pp. 280-281）

ἀν δ' ἐκ προαιρέσεως βλάβη, ἀδικεῖ. καὶ κατὰ ταῦτ' ἤδη τὰ ἀδικήματα ὁ ἀδικῶν
ἄδικος, ὅταν παρὰ τὸ ἀνάλογον ἦ ἢ παρὰ τὸ ἴσον. ὁμοίως δὲ καὶ δίκαιος, ὅταν
προελόμενος δικαιοπραγῇ. δικαιοπραγεῖ δέ, ἂν μόνον ἐκὼν πράττῃ.

(H.N., 1136a, 1-5)

...if a man does an injury of set purpose, he is guilty of injustice, and injustice of the sort that renders the doer an unjust man, if it be an act that violates proportion or equality. Similarly one who acts justly on purpose is a just man; but he acts justly only if he acts voluntarily.

(trans., by H. Rackham, *ibid.*, p. 303)

If someone does harm by choice, he does injustice, and as a result of these sorts of acts of injustice the one who does them is an unjust person, whenever what is done is contrary to proportion or equity. Likewise, whenever someone acts justly, having chosen to do so, he is a just person, and someone acts justly even if he merely acts willingly.

(by Joe Sachs, *ibid.*, p. 96)

「もし、・・・『^{プロポーション}選択』に基づいて害したのであるならば、彼は不正をはたらいているにとどまらず、彼はまた不正な人間なのである。これらの不正行為（^{比例的}ということに^ア背き、^{均等}ということに^イ背いているのであれば、不正行為である）が、ここではまさに選択に基づくそれであるということによって・・・。みずからすすんでそれをなすのであっても、たんにそれだけであれば、これは正しく行為したということにとどまる。」

(高田訳『ニコマコス倫理学』、上巻、p.200)(以上、強調は原文、訳文ともに引用者)

2. 『オデュッセイア』 (ホメロス 岩波文庫上・下巻 1994)

人間の^{エルゲン}営みは布を織っては解き織っては解く「ペネロペイアの仕事」のようなもの。この本は、『イリアス』における「木馬の奸計」の話同様、グローバルなコミュニケーションの触媒となる貴重な知的資源をわれわれに提供してくれる。これも、最初は物語の筋をつかみやすい松平訳を薦める。

Nous étions, après les diamants et l'or, ce qu'il avait de plus précieux.

(Voltaire, 1972, *Candide ou l'optimisme*, Bordas, Chap. 11, 67, p.79)

「海賊の持ち物のなかで、わたしたち女は、ダイヤモンドと黄金についでもっとも貴重なものでした。」

(ヴォルテール、齊藤悦則訳『カンディード』光文社、2015年、p.64。訳は若干変更した。強調は原文ともに引用者。)

3. 『アエネーイス』 (ウェルギリウス 岩波文庫 上・下巻 1976)

ラテン文学の代表作。ウェルギリウスはホメロスに負けじとこの大英雄叙事詩を書いた。イタリアに渡りローマを建国するこの詩の主人公アイネイアースが、ホメロスの『イリア

ス』第13巻では、つぎのように呼びかけられていたことを思い出すのも楽しい。

Αἰνεία, Τρώων βουλευφόρε, νῦν σε μάλα χρῆγαμβρῶ ἀμυνέμεναι, εἵπέρ τί σε κῆδος ἰκάνει .

(ΙΛΙΑΔΟΣ, XIII, 463-464. A . T . Murray, ed., Harvard University Press, 1925, p. 36)

「トロイア勢の参謀役たるアイネイアースよ、いやしくも身内の者の不幸を悲しむ気があるのならば、いまこそおぬしの義理の兄弟をどうしてもかばってやらねばなるまい。」

(ホメロス、松平千秋訳『イリアス』岩波文庫、下巻、1992年、p.31。強調は原文ともに引用者。)

4. 『変身物語』（オウィディウス 岩波文庫 上・下巻 1981～4）

題名からフランツ・カフカの小説『変身』を思い浮べる者もあるだろう。カフカの『変身』はサラリーマン社会の暗部にある問題を指摘していて、それはそれで重要な小説であるが、とにかく重々しく暗く、^{フシユークー}人間の意識を特定の表象に集中させる。一方、オウィディウスのこの『変身物語』は、ポジティブな解放

感に満ちており、多様な自己実現の^{エンテレケイア}完成をわれわれに楽しませてくれる。

dum abest quod auemus, id exuperare uidetur Caetera, post aliud cum contigit illud auemus, Et sitis aequa tenet.

(D'un mot de Caesar, M. de Montaigne, Les Essais, Gallimard, 2007, p. 329)

「欲しいものが手にはいらぬうちは、そのものが最上にみえる。だが、一度これを獲得すれば、また別のものが欲しくなる。こうして欲望は変わることがない。」

(モンテーニュ、原二郎訳『エッセー』岩波文庫、第二巻、1965年、p. 183)

5. 『国家』（プラトン 岩波文庫 1979）

この著作にでてくる「[洞窟の比喻](#)」は、とにかく示唆に富む。社会学ではウォルター・リップマンが名著『[世論](#)』の冒頭に引用しているのを指摘することができるが、古来、この「洞窟の比喻」にインスピレーションを得て古典といわれるようになった思索を展開した者のなんと多いことか。哲学はわたしの専門ではないが、西洋の哲学はすべてプラトンの著作の脚注にすぎないといわれるのも、分かるような気がする。

「哲人統治」の思想のなかに、「法の支配」ではなく「個人の人格による支配」を選択してきた旧共産党一党支配体制の問題点をみいだすのも、ひとつの読み方である。

the prince, who told me with a sigh that the true greatness of life was to be master of ourselves; that he would not have exchanged such a state of life as mine to have been Czar of Muscovy.

(Daniel Defoe, 1906, Robinson Crusoe, J. M. Dent & Sons Ltd, pp. 440-441)

「人生の真の偉大さは自分自身を治めることである、もし自分にあなたのような生き方がえられておれば、モスクワ帝国皇帝*になるより、その方が遥かに望ましいと思うだろうといった。」

(ダニエル・デフォー、平井正穂訳『ロビンソン・クルーソー』岩波文庫、下巻、1971年、p.376。強調は原文ともに引用者。)

*「モスクワ帝国皇帝」は、もはやこの世にはいない。その継承された地位は、1917年のロシア革命によって完全に葬り去られた。そのとき、ウクライーナ、[エストニア](#)、ラトビア、アゼルバイジャンなど多くの国が独立を宣言したが、直後の数年間で、ソビエト社会主義共和国連邦（ボリシェビキ）によりその領土は武力（赤軍）によって再統合された。いま、まさに、その「再統合された旧ロシア帝国の領土」が崩壊しつつある。ウ

クライーナやジョージア（旧称グルジア）のNATO加盟への動きや、ウクライーナやラトビアにおけるロシア語の公用語としての地位の廃止または失効、カザフスタンほかで進む脱キリル文字化なども、この崩壊過程のいったんを表現しているといえるであろう。ちなみに、モルドバにおける脱キリル文字化は、ソ連崩壊直前の1989年にすでにはじまっている。

ウクライーナにおけるウクライーナ語の公用語（国語）としての地位の確立（その裏返しとしてのロシア語の地位の低下）は、[「尊厳の革命（ユーロ・マイダン）」（2014年2月）](#)を引き起こし、さらにウクライーナ東部の紛争やロシアによる「クリミアの併合」（＝占領）を招いていることは、記憶に新しい。キーウ、オデーサ、ハルキウなどウクライーナの歴史ある大都市では、人びとはまだロシア語を話しているが、国語のウクライーナ語化の動きは、「旧ロシア帝国の領土の崩壊」のもっとも象徴的な局面である。このプロセスの中で、脱キリル文字化を推進していたクリミアのタタール人たちは、ウクライーナ西部のリヴィウなどの都市に逃れたが、ロシア連邦内でも、スラヴ系ロシア人とはちがうタタール人の民族意識の高揚がみられるようになっている。東京の[東北沢にある壮麗なモスク](#)が、ロシア革命から逃げてきたタタール人イスラーム教徒の寄宿舎を起源としていることに思いを馳せるのも、「創造的で多層的かつ多価値的な公共空間そして／あるいは市民社会」（creative, multi-layered, and multi-valued public sphere and/or civil society）としての、ひとつの統合されたアジア－ヨーロッパ大陸を想像するのに有益である。中央アジアからクリミア半島に帰還しつつあったクリミア・タタールのひとたちの苦悩を、同じ大陸に住む同胞として共有したい。

2022年2月24日、「ウクライーナはわれわれの兄弟国であり、民族的にも一体である」などといって、ロシアはウクライーナに対する軍事的な侵略を開始した。ロシア革命後の「ウクライーナの独立」が武力で「略奪」され、ソビエト（ロシア）共産党による第一次(1922年)、第二次（1932～33年）の2回にわたる「ホロドモール」（大飢饉の人工的な創出によるウクライーナ人の大量虐殺）と、「シベリアへの強制移動の悲惨」を昨日のことのよう記憶しているウクライーナ人たちは、「祖国」を守るためにロシア人たちと戦っている。これは「ソビエト社会主義共和国連邦のイデオロギーとシステム」に対する戦いであり、「亡霊となって現れるソビエト共産主義との戦い」でもある。ロシア革命の時と同じ闘いをウクライーナの人たちは戦っている。このことが、日本ではあまり知られていない。あるいは、知識人たちによって隠蔽されている。ウクライーナ人たちは、ウクライーナ全土から撤去したボリシェビキの指導者レーニンの像を、二度とウクライーナの土地に建てたくないのである。

これはわたしが、2017～18年にウクライーナに初めて長期滞在する機会を得、国土の西から東、南までの諸都市を広くフィールドワークした結果、一人の社会学者として感得し、また理解したことである。ウクライーナの人たちからいろいろな意見を聴いたなかで、「客観的であろうと努めて理解した結果」である。

ともかく、ウクライーナは「ひとつのネーション」であり、すでに確固たる「国民国家」であることを、わたしたちは忘れないでいたい。ウクライーナで継続する「ロシアに対する独立のための闘争」を「民族主義的な偏向」「ネ

オ・ナチ」と呼ぶのは、「ソビエト社会主義共和国連邦時代のイデオロギー」である。ウクライーナ人たちは、「脱共産主義の闘い」を続けているのである。

そうした気持ちを後押しして、「スラーヴァ・ウクライーニ！　ヘローヤム・スラーヴァ！（ウクライーナに栄光を！　死に伏した英雄たちに栄光を！）」と、わたしたちも東京で叫びたい。ロシア革命後に徐々に「ロシア化」されたカザフスタン、ウズベキスタン、タジキスタン、アゼルバイジャンなどの国でも、いずれ同じ雄たけびの声が力づよくあがることであろう。

こんにちわたしたちが目にはしているのは、ロシア革命を通じて「共産主義的ロシア化」によって70年にわたり抑圧され再統合されていた「旧ロシア帝国の領土」の、「最終的な崩壊の過程」である。

さて、「^{まこと}真に^{おさ}治める」というのが、親がわたしにあたえてくれた名前の謂いである。さて、なにによって、どのように治めることができるのだろうか。ここでは、「中のヘクシスによって」と、簡単に答えておきたい。

μεσότης τις ἄρα ἐστὶν ἡ ἀρετή, στοχαστική γεοῦσα τοῦ μέσου.

(H.N., 1106b, 27-28)

Est ergo virtus mediocritas quaedam, quum medium veluti scopum sibi propositum petat acdestinet.

(Aristotelis Opera Omnia, Volumen Secundum, Parisiis, M DCCC LXXXIII, p.20)

Virtue, therefore, is a mean state in the sense that it is able to hit the mean.
(by H. Rackham, *ibid*, p. 95)

Virtue, then, is a mean, in so far as it aims at what is intermediate. (by T. Irwin, 1985, Hackett Publishing Company, Indianapolis, p. 44)

Therefore, virtue is a certain kind of mean condition, since it is, at any rate, something that makes one apt to hit the mean.

(by Joe Sachs, 2002, Hackett Publishing Company, Indianapolis, p. 29)

Therefore excellence is a kind of mean, since it aims at what is intermediate.

(by W. D. Ross, revised by J. O. Urmson, *The Complete Works of Aristotle*, Volume Two, Princeton University Press, p. 1748)

Por consiguiente, la virtud es una cierta condición intermedia capaz, desde luego, de alcanzar el término medio.

(by José Luis Calvo Martínez, 2001, *Ética a Nicómaco*, Alianza editorial, p. 99)

Die Tugend ist also eine Art Mitte, da sie auf das Mittlere abzielt.

(by Gernot Krapinger, 2017, *Nikomachische Ethik*, Reclam, p. 45)

「^{アレテ}卓越性とは、したがって^{メソテース}中庸であり、^{ト・メソン}“中”を目指すものにほかならない。」（強調は原文ともに引用者）

ὥστε δῆλον ὅτι τὸ δίκαιον ζητοῦντες τὸ μέσον ζητοῦσιν. ὁ γὰρ νόμος τὸ μέσον.

(Πολιτικῶν, 1287b, 4-5)

「したがって、人びとは^{ト・デイカイオン}正しいものを求めるときには、^{ト・メソン}“中”を求めるということはあきらかである。なぜなら、法律は中的なものだからである。」

（強調は原文ともに引用者）

「法律が中的なもの」ということについては、後にもう一度触れることにする。

6. 『ニコマコス倫理学』（アリストテレス 岩波文庫 上・下巻 1971～3）

アリストテレスの本ときくとすぐに難解な哲学的著作であると想像しがちであるが、この本はとても読み易い本である。訳としては岩波全集の加藤信朗訳の方が原文に忠実で注解も丁寧であるようだが、わたしとしてはこの高田三郎訳を薦めたい。人間には善く生きるか悪く生きるかのどちらかの道しかないということ、人間の善さ悪さはその人の選択に現れるということなどをこの本は教えてくれる。振り返ってみよう。われわれが日常口にしていることのほとんどは、物事が

善いか悪いかということではなかったか。さらに、ἀρετὴ καθ' ἑαυτὴν ἐστὶ καλὴ（徳はそれ自体、美しい）、そして、地域社会の高齢化を目の前にして、καλὸν καὶ γέρουσι μανθάνειν σοφά（老人たちにとっても、賢さを学ぶことは、美しく立派である）と、つけくわえておきたい。

τὰς δ' ἀρετὰς λαμβάνομεν ἐνεργήσαντες πρότερον, ὥσπερ καὶ ἐπὶ τῶν ἄλλων τεχνῶν. ἃ γὰρ δεῖ μαθόντας ποιεῖν, ταῦτα ποιοῦντες μανθάνομεν, οἷον οἰκοδομοῦντες οἰκοδόμοι γίνονται καὶ καθαρίζοντες κιθαρισταί. οὕτω δὲ καὶ τὰ μὲν δίκαια πράττοντες δίκαιοι γινόμεθα, τὰ δὲ σώφρονα σώφρονες, τὰ δ' ἀνδρεῖα ἀνδρεῖοι.

（H.N., 1103a, 31-1103b, 2）

「倫理的な卓越性ないしは徳のばあいには、・・まずそうした活動をおこなうことによってわれわれはその徳を獲得するにいたるのであって、それは、もろもろの^{テクネー}技術のばあいに似ている。・・たとえば、ひとは建築することによって大工となり、琴を弾ずることによって琴弾きとなる。それと同じように、われわれはもろもろの正しい行為をなすことによって正しい人となり、もろもろの節制的な行為をなすことによって節制的なひととなり、もろもろの勇敢な行為をなすことによって勇敢な人となるのである。」（高田訳『ニコマコス倫理学』、上巻、1971年 pp.56-57）
つまり、「^{エータイケー・アレテ}倫理的な卓越性」は「^{ディアノエータイケー・アレテ}知性的な卓越性」と同様に、^エ行為の^ネ実践＝^ル実^ゲ現^イによってはじめて獲得できるものである。

7.『政治学』（アリストテレス 岩波文庫 1961）

原題名はτὰ πολιτικάで、ギリシア語を字義通りにとれば「ポリスに関することども」という意味になる。「政治学」とか「国家学」と訳すのは、厳密にいえば、まちがいである。「政治学」や「国家学」を意味するギリシア語はἡ πολιτικήとして別にあるからである。この本をわたしは社会学の古典であると思っている。とりわけ、都市の社会学的研究には欠かせない本である、と。見田宗介他編『社会学文献事典』（弘文堂 1998）には、この『政治学』も『ニコマコス倫理学』も社会学的研究の古典としてとりあげられている。

ちなみに、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』と『政治学』はひとセットの著作であり、前著が終わるところから、後著ははじまっている。この二つの連続した著作は、T.アーウィンが前著の注釈書に書いているように「実際には『倫理学』（ethics）の著作ではなく『政治学』（political science）の著作である」が、その内実はいまから 120 年も前にアメリカの社会学者チャールズ A.エルウッドがすでに的確に性格づけているように、「人類史上初の社会学(sociology)の試み」であった*。

*チャールズ A. エルウッド（1902）（岩永真治、藤井理南子、松岡真未、渡邊千尋訳）「社会学者としてのアリストテレス」（明治学院大学社会学・社会福祉学会編、Socially、第 30 号、2022 年所収）を参照。

都市社会研究のための重要な論点をいくつか紹介しておこう。

1) οὐχ ἡ αὐτὴ ἀπλῶς ἂν εἴη πολίτου καὶ ἀνδρός.

(Πολιτικῶν , 1277a, 22 -23)

("the goodness of a good citizen in general will not be the same as that of a man," trans by H Rackham, ibid, p. 191)

「一般的な市民の^{アレテ-}徳と人間の^{アレテ-}徳は、同じではないであろう」(強調は原文、訳文ともに引用者)

2) Ὑπόθεσις μὲν οὖν τῆς δημοκρατικῆς πολιτείας ἐλευθερία. ...ἐλευθερίας δὲ ἐν μὲν τὸ ἐν μέρει ἄρχεσθαι καὶ ἄρχειν. καὶ γὰρ τὸ δίκαιον τὸ δημοτικὸν τὸ ἴσον ἔχειν ἐστὶ κατ' ἀριθμὸν ἀλλὰ μὴ κατ' ἀξίαν.

(Πολιτικῶν , 1317a, 40 -41, 1317b, 3-5)

「民主制的国制の根本原理は、自由である。・・・民主制的な正し^{ト・ディカイオン}きは、人の数に応じた均し^{カタ・アリトウ・モン・ト・イソン}さを持つことであり、人の価値^{カタ・ア・クシアン}に応じて持つことではない。」(強調は原文ともに引用者。また、訳文を一部変更した)

3) ἐν δὲ τὸ ζῆν ὡς βούλεται τις. τοῦτο γὰρ τῆς ἐλευθερίας ἔργον εἶναί φασιν, εἴπερ τοῦ δούλου ὄντος τὸ ζῆν μὴ ὡς βούλεται. τῆς μὲν οὖν δημοκρατίας ὅρος οὗτος δεύτερος.

(ibid, 1317b, 12-17)

「（民主制の）もう一つの目標は、人が好きなように生きるということである。なぜなら、いやしくも好むままに生きることのできないことが奴隷たる者の定めなら、好むままに生きることを自由の働きだと人びとはいうからである。したがって、これが民主制の第二の目標である。」（強調は原文ともに引用者）そして、

4) δεῖ... σχολῆς καὶ πρὸς τὴν γένεσιν τῆς ἀρετῆς καὶ πρὸς τὰς πράξεις τὰς πολιτικάς.

(ibid, 1329a, 1-2)

Otium enim quum ad virtutem ingenerandam tum ad civilian munera obeunda requiritur.

(by Aristotelis Opera Omnia, Volumen Primum, M DCCC LXXVIII, Ambrosio Firmin -Didot, p. 610)

Leisure is needed both for the development of virtue and for active participation in politics.

(by H. Rackham, p. 575)

Leisure is necessary both for the development of excellence and the performance of political duties.

(by B. Jowett, 1984, in The Complete Works of Aristotle, ibid, p. 2109)

「・・・徳が生じてくるためにも、政治への積極的な参加のためにも、^{スコレース}閑暇(=自由時間)が必要である。」(強調は原文ともに引用者) また、

5) τόν τε γὰρ μέλλοντα καλῶς ἄρχειν ἀρχθῆναί φασι δεῖν πρῶτον. ἔστι δ' ἀρχή, καθάπερ ἐν τοῖς πρώτοις εἴρηται λόγοις, ἢ μὲν τοῦ ἄρχοντος χάριν, ἢ δὲ τοῦ ἀρχομένου. τούτων δὲ τὴν μὲν δεσποτικὴν εἶναί φαμεν, τὴν δὲ τῶν ἐλευθέρων.

(ibid, 1333a, 3-6)

「立派に支配しようとする者は、・・・まずもって支配されねばならない・・・。そして支配には・・・二つあって、そのひとつは支配する者のためのものであり、他は支配される者のためのものである。そして、われわれは前者を主人の〔奴隷にたいする(δεσποτικὴν)〕支配といい、後者を自由人の(ἐλευθέρων)支配といっている。」

(山本 訳、前掲書、p. 344。強調は原文ともに引用者。)

ところで、以上の定義にしたがって、よく知られた[シカゴ学派の都市社会学者 R・E・パーク](#)の「都市は精神=心の^{ステーツ}状態(a state of mind)である」という定義を拡げて解釈することができる。すなわち、「都市の研究は、^{メソテース}中庸の遵守において本質的に構成されるものの、

行動^{プラクシス}と感情^{チュモス}の選択^{プロアイレシス}を決定している行動性^{ヘクシス}向^{シス}=振る舞い、すなわち人間の卓越性^{アレテ}あるいは徳(a settled disposition or state of the mind determining the choice of actions and emotions, consisting essentially in the observance of the mean)に関する研究であり、思慮^{プロネーシス}(prudence and/or intelligence)が支配するであろう原則の遵守とそこからの逸脱によって示される行動性^{ヘクシス}向^{シス}に関する研究である」と。したがって、都市の研究は、究極的には「選択^{ヘクシス}性^{プロアイレシス}向^{テイク}」(ἐξίς προαιρετική)の研究ということになる。

この「行動性^{ヘクシス}向^{シス}」としての「選択^{プロアイレシス}」には、「自ら望んだ意図的なもの(ἐκούσια)、すなわち随意的なもの(transactions which are voluntary)」と、「自分の意思には必ずしも基づかないなもの(ακούσια)、すなわち不随意的なもの(transactions which are involuntary)」がある。市場^{マーケット}をめぐる人間関係(販売、購買、貸金、質入、貸与、寄託、雇用など)は、「随意的なもの^{ヘクシス}」の代表例である。

「『損失』ならびに『利得』という名称は、随意的な交易に由来する。...自分に属する以上を得ることが利得、最初自分に属していたよりも少なくしか得ないのが損失と呼ばれる。...「正」とは、ここでは、一方の意に反して生じた事態におけるある意味における利得ならびに損失の「中」であり、事前と事後との間に均等を保持するということにほかならない。」

(高田訳、前掲書、上巻、pp.239-240。強調は引用者。訳文にあった強調は取り除いた。)

ただ、この市場をめぐる人間関係には通常、「経済的交換」

(αλλαγές) だけではなく、「社会的交換(あるいは分与)」
(μετάδοσις)が織り交ざっている。

一方、後者の人間関係すなわち「不随意的なもの」には二種類あって、第一に、露骨に暴力的な人間関係(侮辱、監禁、殺人、強奪、傷害、罵言、虐待、セクシャル・ハラスメント、パワー・ハラスメント、モラル・ハラスメントなど)のばあいと、第二に、隠密のうちに行われる暴力的な人間関係(窃盗、強制性行、投毒、誘拐、奴隷誘出、暗殺、偽証、アカデミック・ハラスメント—暗黙の合意形成とその隠匿的行使=東大性向一など)のばあいである。そして、これらの「選択」は、普遍的な正義の一部分(メロス)である「^{ディオオルトーティコン・ディカイオン}矯正的正義」あるいは

「^{エパノルトーティコン・ディカイオン}匡正的正義」に関係しており、そうした

「^{ト・ディカイオン}部分としての正義」は、前者においては違約をめぐる「損失の回復」を、後者においては加害者によって与えられた「被害の償い」を求めることで、以前の「人間関係の均衡の回復」を要求する。この都市紛争は、「^{アナログア・アリトメタイケー}算術的比例」の原則によって解決される。

法律によるこうした都市紛争の解決では、当事者が誰であるかは問わない。医者であるか弁護士であるか社長であるか会社員であるか富裕者であるかは問わない。法律が顧慮するのは、ただ紛争の当事者間における「害悪」の「^{ヒュペルボレー}超過」あるいは「^{エレイプシス}不足」だけである。紛争当事者のどちらが不正を働きどちらが働かれたのか、またどちらが「害悪」を与えどちらが与えられたのか

が問題であり、この意味で、法律は紛争当事者のいずれも「均等な人びと」として取り扱う。

一方が殴打し他方が殴打されるという場合、また一方が殺し他方が殺される場合、さらに一方が犯しもう一方が犯されるという場合も、当事者は、「する」と「される」で「不均等に区分」される。ここで法律を行使する裁判官は、一方から「不均等な利得」を奪うことによって、「罰という損失」でもって人間関係の「均等化」(＝回復)を試みる。紛争において人びとが裁判所に行くのは、このためである。

ところで、裁判官に訴えるということは、「正^トし^トさ^ト」に訴えることであり、それは「中^ト的^トな^トもの^トを^ト求^トめ^トる^ト」ということは、すでに述べた。アリストテレスは、『ニコマコス倫理学』第5巻第4章(1132a 21-33)で、つぎのように述べている。

「裁判官」(ディカステース＝正しさをつかさどるひと)はいわば生きた「正しさ」たるべき意味を持っているのである。その際、ひとびとは裁判官が「中」的であることを求めているのであって、ある地方では現に裁判官のことを「メシディオス」(＝中を得る人)と称している。「中」を得ることによって「正しさ」を得るだろうというわけである。...「正しさ」とはやはりある意味での「中」なのである。裁判官は均等を回復するのであるが、彼はいわば一つの線分が不均等な两部分に分かたれている場合に、大きな部分が全体の半分以上を超えているそれだけのものをそこから取り除いて、小さ

い方の部分へ付け加えてやるのである。そして全体が切半されたものになるにいったとき、「自分のものを得た」といわれる。均等なものを得るのだからである。「均等」^{ト・イソ}とは、ここでは、算術的比例に即しての、過多と過少との「中」^{ト・イソ}にほかならない。

「正しさ」*δίκαιον* という名称の由来もここにある。それは切半的 *δίχαιον* とでもいうほどの意味一切半されるのだからであり、裁判官 *δικαστής* とは、すなわち、切半者 *διχαστής* を意味している。」（前掲訳書、上巻、1132a、pp. 183-184。表現を若干変えた。強調およびルビは引用者によるもの。）

ところで、人間関係における「不正」を「正す」（＝均等化する）場合、大都市では裁判官に訴えることが多く、地方都市や農村地域では当事者間の話し合いで解決することが多い。が、どちらの場合にも、より考慮されるのは「法律が求める正義」ではなく、人びとが社会規範として共有している「正しさ」^{ト・ディカイオン} である。そして、都市の社会関係や紛争をめぐって社会学者が把握しようといつも試みているのは、この後者である。都心部の再開発やパワー・ハラスメント、アカデミック・ハラスメントをめぐって争われているのは、社会規範としては共有されているが未だ法規範になっていない

「正しさ」^{ト・ディカイオン} である。

したがって、そのような問題に関して法律学者はいつも、「違法ではない」と繰り返している。それは、法律がないから「違法ではない」といっているに過ぎない。しかしそれは、ここでの文脈でいえば、「均等ではない」のであって、「均等化」されるべき「^{プレイオーン}過多（^{ヒュペルボレー}超過）」と「^{エラットーン}過少（^{エレイプシス}不足）」が現実の条件として人間関係をめぐって存在しているのである。都市の社会紛争をめぐって、法律学者と社会学者は、この点でぶつかりあう。社会学者は、「社会的不正あるいは不公正」と取り組んでいるのである。

ちなみに、アリストテレスがいうように「不正」(Injustice)には二通りあって、ひとつは「違法的なもの」(unlawfulness)であるが、もうひとつは「不均等的なものあるいは不公正なもの」(inequality or unfairness)である。そして、「違法的なもの」はいつも「不均等的」ではないが、「不均等的なもの」は、かれの定義にしたがえば、いつも「違法的なもの」なのである。すなわち、そこには、「均等化」されるべき「過多」と「過少（すなわち不足）」が存在している。社会学者はこの点に敏感であり、そうであるから、よく「すべてのひとがまだ問題にしていけないことを、むりやり社会問題として暴き出す」といって非難されるのである。しかし、いずれ

「^{ディカイオシュネー}法規範」になるべきものが、そこにはすでに「^{ト・ディカイオン}正しさ」として存在しているのである。それを社会学者は研究対象として取り扱っている。また、ここに社会学者に固有の研究領域がある。

さて、「^{ヘクシス}行動性向」としての「もう一つの^{プロアイレシス}選択」は、名誉、財貨、そのほか「公共空間」(*πολιτεία*)において市民に共有されてい

るものの配分に関係している。たとえば、市民や人間としての「名誉の配分」が公平・公正になされているか、税金など「公的財貨の再配分」が公正になされているか、「仕事や業務の配分」が適正・公正になされているかなどの「選択」に関わっている。

この「^{ヘクシス・プロアイレディケー}選択性向」は、普遍的な正義のもう一つの部分、あるいは特殊な正義(卓越性あるいは徳としての正義)である

「^{ディアネメーティコン・ディカイオン}配分的正義」に関係しており、それによって「失われた人間関係の均衡の回復」を要求し、調整する。この種の都市紛争は、数学者がいうところの「^{アナロギア・ゲオメトリケー}幾何学的比例」の原則によって解決される。

特定の私立大学（たとえば、明治学院大学）やその大学院の「法人としての名誉」や、その在学生、卒業生の「人間としての名誉」を「不均等に配分」する、すなわち毀損する慣習的行動は、「配分的正義」をめぐるアカデミック・ハラスメントの「性向」である。一般に、高等教育機関は大都市に集中しているので、こうした「選択性向」は、労働市場をめぐる典型的に都市的な社会紛争の「行動性向」を示しているが、大都市の競争的環境はそれを表面的には隠蔽する傾向がある一方、地方都市や農村地域では、高等教育機関が少ないか存在しないにもかかわらず、労働市場の緊張的競争関係が弛緩しているために、こうした「配分的不正義」を表立って肯定する「行動性向」が露わになる。

ところで、中山間地域は、一般には限界集落の代名詞にもなっているが、大都市との関係があまりないので、むしろ「人間としての名誉」をめぐる「配分的不正義」を均等化(=回復)する場になっている。

ちなみに、「適度な選択性向」(hexis or disposition hitting the mean)を形成する教育には、公共性を創り上げる「^{バイデニア・ヘー・プロス・ト・コイノン}市民的教育」と、立派で美しい行動性向を涵養する「^{ヘー・カタ・ヘカストン・バイデニア}人間的教育」とがある。

以上、「^{ヘクシス・プロアイレティケー}選択性向」(choice disposition of actions and emotions)という概念は、これまで社会学における^{シテイ}都市や^{ローカル・コミュニティ}地域社会(村落をふくめて)の^{メトドス}研究が、おもにメゾ・レベルに照準する^{メトドス}研究であったものを、ミクロ社会学へと展開する堡壘になる。

8.『弁論術』(アリストテレス 岩波文庫 1992)

太平洋戦争の敗戦によって日本はデモクラシーの諸制度を整えることになったはずなのに、デモクラシーの基礎になる議論の仕方について書かれた古典中の古典であるこの本の内容は、江湖に訴えられることがなかった。机をたたき椅子をガタガタ鳴らし大声で反対を繰り返しても、議論にはならない。議論なくしてデモクラシーは機能しない。冷戦が終焉しバブルが崩壊して後、この本は重々しい全集の一冊から手輕

で親しみやすい文庫本になった。喜びたい。しかし、われわれはこの本から人心収攬の術を学ぶこともできるし、この本によってソフィストになることもできる。心して、またよく考えながら読みたい本だ。Πάντες ἄνθρωποι τοῦ εἰδέναι ὀρέγονται φύσει. (すべての人間は、生まれつき、知ることを欲する。『形而上学』980a,22)そして、διὰ γὰρ τὸ θαυμάζειν οἱ ἄνθρωποι καὶ νῦν καὶ τὸ πρῶτον ἤρξαντο φιλοσοφεῖν. (驚嘆することによって人間は、今日でもそうであるが、あの最初のばあいにもあのように、知をもとめはじめたのである。同982b,12—13) 日本語訳のタイトル「形而上学」の、ペジョラティブな言葉の響きによって意味されるものとは反対に、この本は、人間をめぐる事象に関して多くの真実を穿っている。

『Τὰ μετὰ τὰ φυσικά (形而上学・・・じつは、この日本語に問題がある)』(岩波文庫 上・下巻 1959、1961)も、古代ギリシア人が「自然」に^{ビュシス}むきあった姿を想像しながら、素直な気持ちで読んでもらいたい本である。

9. 『ギリシア・ローマの盛衰』(村川堅太郎、長谷川博隆、高橋秀 講談社学術文庫 1993)

この本の最後のところで村川堅太郎は、1964年に東京でおこなわれたオリンピックは、古代ギリシア市民の習俗を極東の日本

にまでもたらした点で世界史的な意味のあるできごとだった、と書いている。今日の日本人の生活は、一回のオリンピックなどとは比較にならぬ深い関係で、古典古代市民の文化とむすびついている、と。だが、ひとはこのつながりを意識しない。

第1回の東京オリンピックでは古代ギリシア市民の習俗の日本への到達と暗黙のうちにそれを背景とした日本社会の「近代化」が問題になったとすると、2020年の第2回東京オリンピックでは、なにが問題となるであろうか。（4）の⑨⑩で紹介する論点に関連づければ、おそらく日本人にとっての西洋古典古代に対する向き合いの不十分さを越えて、ユーラシア大陸前史としての、中央アジアの古典古代（アムダリヤ河上流のアイハヌムやタフティーサンギンの遺跡にみられる古代ギリシアや古代ローマの影響）や古代ギリシア以前のヒンドゥー教や仏教的な伝統の再認識やそれらとの対話、市民社会や公共圏をユーラシア大陸レベルで創成するためのグローバルな対話が問題になり、また求められてくるであろう。これは世界史の第三ラウンドの始まりとなるであろう。

村川は1991年11月8日の夜、ある研究会で2時間あまり「古典古代における市民としての友人関係（＝友愛）」について報告をし、翌日から病に伏したそうである。肉体も精神も若く澆刺としたわれらがその善き意志を引き継ごうではないか。しかし同時に、近代社会を反省的に創成する新しい世界のグローバルな文脈のなかで、そうする必要があるのである。

Wenn wir uns dem Altertum gegenüberstellen und es ernstlich in der Absicht anschauen, uns daran zu bilden, so gewinnen wir die Empfindung, als ob wir erst eigentlich zu Menschen würden.

(Johann Wolfgang Goethe, 1991, Wilhelm Meisters Wanderjahre, Carl Hanser Verlag, S. 694 Z. 23 -26)

「われわれがみずからを古代に対置し、それによって自分を形成しようと真剣に古代を静観すると、自分がはじめて本当に人間になるような気がする。」

(ゲーテ『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』第3巻「マカーリエの文庫から」)

10. 『ブッデنبローク家の人びと』(トーマス・マン岩波文庫 上・中・下巻 1969)

この長編小説はドイツの一ブルジョア家族の没落の歴史を描いたものである。社会学的に興味深いのは、18世紀の啓蒙思想に鍛えられた実業家を初代とする一家族が、代を追うにつれて次第に精神的、芸術的なものに支配されていき、生活力を失っていく過程である。

つい50年前までは素朴で剛健で貧しかった地方武士の家が、わずかの間に大をなし、清頭^{きよあき}の生い立ちと共に はじめてその家系

に優雅の一片が忍び込もうとすると、たちまち迅速な没落の兆^{きざし}を示しはじめるだろうことを、かれは蟻^{あり}が洪水を予知するように感じていた。

(三島由紀夫『豊饒の海』第一巻「春の雪」 新潮文庫 2002)

マンの『ブッデنبロック家の人びと』は、実学志向の塾が作家や芸術家を輩出しながら徐々に退廃的でアンニュイな雰囲気^{きふき}が支配する近代的な大学校に変化していく過程と重ねあわせながら読むと、さらに面白い。家族や学校を単位に、A・マズローがいう基本的欲求間の優先序列の問題を考え、
てみることもできるだろう。

πρὸς δὲ τούτοις οὐχ ἡ αὐτὴ ὀρθότης ἐστὶ τῆς πολιτικῆς καὶ τῆς ποιητικῆς, οὐδὲ ἄλλης τέχνης καὶ ποιητικῆς.

(Περὶ Ποιητικῆς, 1460b, 13 -15, by D.W.Lukas, Aristotle, Poetics, Claredon Press, 1968, p. 43)

「詩作の技術^{テクネー}における『正し^{ト・ディカイオン}さ』は、政治の技術における『正しさ』と同じではないし、また他のいかなる技術における『正しさ』とも同じではない。」

(アリストテレス、松本仁助・岡道男訳『詩学』岩波文庫、1997年、p. 96。強調は原文ともに引用者。)

ἡ παιδεία ὁμοία ἐστὶ χρυσῷ στεφάνῳ. καὶ γὰρ τίμην ἔχει καὶ πολυτέλειαν.

「教養は黄金の冠に似ている。それは多くの『名誉』と『出費』をともなうから。」（古代ギリシアの文献）

(4) 3～4年次で読んで欲しい本

1. 『人間の条件』（ハンナ・アーレントちくま学芸文庫1994）

古典世界の知を現代社会の自己分析にいかした典型的な書である。もとは1956年にアメリカのシカゴ大学でおこなわれた

「^{ウイタ・アクティウア}活動的生活」という表題の一連の講義である。ドイツ語やイタリア語の本のタイトルはこのラテン語の講義の題名をそのまま使用している。この本がわたしにとって刺激的であったのは、労働／仕事／活動の区別の問題であり、また公的領域と私的領域の関係の歴史的な変化の問題であり、「現われの空間」や「唯一性としての存在の多数性」をめぐる思索であった。この著作の内容は、いまも、わたしの思考の基礎にある。

Ὅτι μὲν οὖν δεῖ τῇ μελλούσῃ καλῶς πολιτεύεσθαι τὴν τῶν ἀναγκαίων ὑπάρχειν σχολὴν ὁμολογούμενόν ἐστιν.

(Πολιτικῶν, 1269a, 34-36)

「正しく治められようとする国においては、生活に必要なものに煩わされない閑暇(=自由時間)が存しなくてはならないということは、すべての人が承知しているところである。」

(アリストテレス、山本光雄訳『政治学』岩波文庫、1961年、p.101。強調は原文ともに引用者。)

2.『アメリカの小さな町』(トニー・パーカー 晶文社1993)

アメリカの都市というとニューヨーク、ロサンゼルス、シカゴなどの大都市を思い浮かべがちだが、この本で紹介されているのはカンザス州の人口2000人規模の小さな町の生活である。郡保安官からウェートレス、美容師、酒屋、郵便局長、看護婦、学生、教師、葬儀屋、牧師、画家、石油長者ご隠居さん、町のならず者まで、100人が語る、わたしの町、わたしの人生。映画やテレビのニュースではあまり知ることのできないもうひとつのアメリカの素顔、つまりアメリカの小都市にあるゆったりとした時間の流れをこの本を通して知ることができる。1999～2000年にわたしがはじめてアメリカに長期滞在した折に、ミシガン州ホラント市(文字通り、オランダ系の移民の町)で体験した小世界が、ここにはある。

Мы в деревне стараемся привести свои руки в такое положение, чтоб удобно было ими работать; для этого обстригаем ногти, засучиваем иногда рукава. А тут люди нарочно отпускают ногти, насколько они могут держаться, и прицепляют в виде запонок блюдечки, чтоб у ж ничего нельзя было делать руками.

(Лев Толстой, 2007, Анна Каренина, Эксмо, С. 39)

「われわれ田舎に住んでいる者は、できるだけ働きいいように、自分の手を処理しているので、そのために爪も切るし、ときには袖もたくしあげる。ところが、ここではみんながわざと、のばせるだけ爪をのばして、小皿みたいな飾りボタンをつけて、手ではなにひとつできないようにしている・・・。」（トルストイ、米川正夫訳『アンナ・カレーニナ』筑摩書房、世界文学大系 37、1958 年、p. 29。強調は原文ともに引用者。）

3. 『ユダヤ人問題の原型・ゲットー』（ルイス・ワース明石書店 1993）

ユダヤ民族のディアスポラ（離散）の歴史は、かなりの部分、欧米の都市におけるユダヤ人の居住区すなわちゲットーの歴史である。ワースのこの本は、シカゴのユダヤ人社会を研究するにあたって、ゲットーの起源、ゲットーの制度化、典型的ゲットーとしてのフランクフルトの事例、ユダヤ人の精神などにも視野を広げている。しかし、この本の序文で R・E・パークが述べているように、20 世紀初頭のアメリカの大都市においてゲットーはもはやユダヤ民族に限定的に使用される用語ではなくなった。それはいかなる人種集団、文化集団にも適用されうる用語となったのである。ハーヴァード大学の社会学者 W・J・ウィルソンは今日、"ghetto underclass" という概念を新しく提起している。

他方、1970年代以降、アメリカではいわゆるポスト・フォーディズム期の社会経済構造の変化にともなってゲッター内の経済活動が加速度的に衰退することで、ゲッターの中産階級やエリート層が転出し、最貧困層だけが残されて、ゲッターの「統合」機能が失われたといわれている。こうして、「排除の空間」でしかなくなったゲッターの現状を、社会学者ロイック・ヴァカン「ハイパーゲッター」と呼んでいる。なお、徳永恂『ヴェニスゲッターにて』（みすず書房、1997）も薦めておきたい本である。

O Zarathustra, hier ist die große Stadt : hier hast du nichts zu suchen und alles zu verlieren.

「おお、ツァラトゥストラ、ここは大都会だ。ここにはあなたの求めるものはひとつもない。失うものばかりだ。」

（ニーチェ、前掲書、p. 61。強調は原文ともに引用者。）

ツァラトゥストラはどのように語ったか。古代ギリシア人はかれのことを「ゾロアスター」と称した。かれは古代インドーイラン人の宗教の改革者として登場している。人間性において、＜アポロ的なもの＞の近代的頹廢に対して＜ディオニュソス的なもの＞の復活を主張することで、現代の都市文明にあてられる光とはなにか。アゼルバイジャンのバクーに行くと、[超近代的な大都市の環境の中に、「ゾロアスターの火」が護られている](#)。

4. 『都市社会学』（C・G・ピックヴァンス編 恒星社厚生閣
1982）

ピックヴァンス編のこの本をとりあげておきたい。この論文集は、『^{アーバン・ソシオロジー}都市社会学』という題名とは反対に、^{ニュー・アーバン・ソシオロジー}都市社会学批判を企図したものである。なかでもマニユエル・カステルによる二本の論文「都市社会学は存在するか」と「都市社会学における理論とイデオロギー」は、都市社会学という学問の無理論性、非科学性を暴露する衝撃的な内容であった。それはパリの五月革命の只中から生みだされた理論的な営為でもあった。また、フランス語の英語への翻訳によるこの論文集出版のインパクトを同時代的に日本で表現したものに、吉原直樹『都市社会学の基本問題』（青木書店、1983）がある。1960年代後半から80年代初頭にかけての著作で、出版されてちょっと時間がたったが、社会学において都市および都市社会を理論的に探求しようとする者にとっては、依然として重要な、現代の古典である。著者の近刊『都市社会学—歴史・思想・コミュニティ』（東京大学出版会、2018年）同『コミュニティと都市の未来—新しい共生の作法—』（ちくま新書、2019年）も、都市社会学の理論的で今日的な地平を把握する意味で、重要な著作である。

^{ボリス}都市および^{ヘー・ポリティケー・コイノニア}都市社会の未来に関しては、拙稿「ユーラシア大陸統合の社会学—都市への権利と都市的なものの未来構想—」（末尾の拙著紹介②）を参照してほしい。

「かれは、パリにいても旅行に出ても、手帖を手離さず、観察したことをたえず書きとめた。そして、これを材料として、創作した。」

(ドーデ、朝倉季雄訳『サフォー—パリ風俗—』岩波文庫、1951年、「訳者解説」、p.292。強調は引用者。)

5. 『イスラム都市研究』 (羽田正、三浦徹 東京大学出版会 1991)

都市の研究には現在、大きく分けて二つの潮流がある。ひとつは、1) 西欧市民社会型の都市を批判的にであれ肯定的にであれ前提にしているものである。前述の^{アーバン・ソシオロジー}都市社会学と^{ニュー・アーバン・ソシオロジー}都市社会学批判はともに、この潮流に属する。もうひとつは、いま述べた潮流に大きく反旗をひるがえすものであり、2) イスラームの都市を研究する流派である。この流派は、イスラームの都市には西欧の市民身分にみられるような特権的な意識は存在したことがなく、イスラームの都市はすべての者が自由に商いができる空間であると主張している。イスラームの都市には、西欧的な

「^{シテイスンシツズ}市民的平等」の観念はないが、ムスリム同士の平等な扱いの原則が存在する。『イスラム都市研究』はこの流派の研究の成果を集約したものである。また、世界中のイスラーム都市の多種多様な情報が、板垣雄三・後藤明編『事典・イスラームの都市性』(亜紀書房1992)には収められている。わたし自身は、西欧的な「市民的平等」とムスリム同士の平等性は、古代ギリシア起源の同根思想ではないかと考えている。さらにさ

かのぼれば、[サンスクリット](#)で書かれた諸文献のなかに、その原思想を発見できるかもしれない。

ところで、中国の西部や南西部には、アラビア語でコーランを読むイスラーム教徒が存在する。かれらはアラブではない。東チモール問題やスリランカのタミル紛争など、イスラームは、われわれアジアの問題でもある。

われわれにとってのこのアジアの問題を、ユーラシア大陸レベルの市民社会と公共圏^{ヘーゲル・ポリティック・コミュニティー}の創造的構築の問題に関連づけていえば、第一に、グローカリゼーション(glocalization)が「地域性(localities と regionalities)」を創発する局面で口述性(orature)と文学(literature)の弁証法的関係性が問題となるだろう。あるいは"声(voice)"と"文字(letter)"のあいだの対立関係の問題といってもよい。第二に、イスラーム社会が多様に築いてきた政治的権力をコントロールするための市民社会システム(個人の生活と財産を守るための法の支配、宗教的および民族的多元主義、意思決定に関する諮問と合意の下での、ムスリム共同体の国家からの独立など)が、再発見と再探究の対象となるであろう。"ウイグルの声"と、支配的言語としての"漢字"の対立は、グローカリゼーションの文脈における地域創成の緊張を表現していると思われる。

Die Einsicht, daß mein Problem ein Problem aller Menschen, ein Problem alles Lebens und Denkens sei, überflog mich plötzlich wie ein heiliger Schatten.

(Hermann Hesse, 1957, Demian, Gesammelte Dichtungen, Dritter Band, S.157)

「自分の問題はすべての人間の問題であり、すべての生活と思索の問題だという悟りが、神聖な影のように突然わたしの上をかすめ過ぎた。」

(ヘルマン・ヘッセ、高橋健二訳『デミアン』新潮社、ヘッセ全集6、1982年、p. 50。強調は原文ともに引用者。)

6. 『リーディングス・日本の社会学・7・都市』（鈴木広・高橋勇悦・篠原隆弘編 東京大学出版会 1985）『リーディングス・日本の社会学・6・農村』（中田実・高橋明善・坂井達朗・岩崎信彦編、東京大学出版会 1986）

都市研究、農村(村落)研究において、日本の社会学者が書いたものでオリジナリティがあると判断された論文が、それぞれの巻に収められている。ただし、都市研究の巻には、日本の近隣関係について論じた R・P・ドーアの論文が一本挿入されている。農業や農村問題に関する新しいリーディングスとしては、蓮見音彦編『講座社会学3・村落と地域』（東京大学出版会、2007）がある。

We know that transition from a simple to a complex society has consisted in the increase of division of labor, and in specialization of technical functions. Transition from a rural to an urban society represents just such a transition from a relatively simple to a complex society.

(P. Sorokin & C.C. Zimmerman, 1969, Principles of Rural-Urban Sociology, Henry Holt and Company, pp. 45 -46)

「われわれは、単純社会から複雑社会への移行は、分業の増進と技術的機能の特殊化に存したということを知っている。

ルーラル・ソサイエティ 田舎社会 から アーバン・ソサイエティ 都市社会 への移行は、まさにこの比較的単純社会から複雑社会への移行である。」

(ソローキン・ツインマーマン、京野正樹訳『都市と農村—その人口と交流—』巖南堂書店、1940年、p.77。訳を若干変更した。なお、強調は原文のイタリック・訳文のルビともに引用者。)

7.『町内会と地域集団』（倉沢進・秋元律郎編 ミネルヴァ書房 1990）

地域社会研究のなかで理論的および実証的研究の両方に比較的蓄積のあるものとして、町内会研究がある。この本は、1980年代までさまざまな方向性をもって展開され水準が高められてきた町内会研究を、一冊の本に集約したものである。都市社会学・地域社会学における町内会研究の成果としては、

玉野和志『東京のローカル・コミュニティ』（東京大学出版会、2005）があり、第5回日本都市社会学会賞を受賞している。また、田中重好『共同性の地域社会学』（ハーベスト社、2007）も、第1回地域社会学会賞を受賞した、関連する研究成果である。どちらも地域社会に程度の差はあれインテンシヴに入り込むタイプの研究である。

なお、社会学における都市・地域社会研究の全領域を知りたい人には、『都市社会学コレクションⅠⅡⅢ』（日本評論社、2011～12）『地域社会学講座・全3巻』（東信堂、2006）が、詳細な情報を提供してくれる。都市社会研究の全領域を俯瞰するためには、ハンドブックとして中筋直哉・五十嵐泰正編『よくわかる都市社会学』（ミネルヴァ書房、2013）が役に立つ。

Je sais qu'il y a une espèce de contrat et même le plus saint de tous entre le bienfaiteur et l'obligé. C'est une sorte de société qu'ils forment l'un avec l'autre, plus étroite que celle qui unit les hommes en général, et si l'obligé s'engage tacitement à la reconnaissance, le bienfaiteur s'engage de même à conserver à l'autre, tant qu'il ne s'en rendra pas indigne, la même bonne volonté qu'il vient de lui témoigner, et à lui en renouveler les actes toutes les fois qu'il le pourra et qu'il en sera requis.

(J-J Rousseau, 2014, Les Rêveries du promeneur solitaire, Œuvres complètes, Tome XX— 1776-1778, Classiques Garnier, p. 241)

「わたしは、恩人と恩をうける者とのあいだには、一種の契約のようなものが、それもあらゆる契約のなかでもっとも神聖なものがあると思っ

ている。両者が結ぶ関係は人間一般を結びつける社会関係にくらべていっそう緊密な一種の社会関係なのである。そこでは、恩を受けた者は暗黙のうちに感謝を約束するとするならば、恩人のほうも同様に、相手にたいして、その人がそれにふさわしくない人間にならないかぎり、かれに示してやったその好意をもちつづけ、自分の力でできるときには、そしてもとめられるときには、いつでもふたたびそれを行為によって示すことを約束するのである。」

（ジャン＝ジャック・ルソー、今野一雄訳『孤独な散歩者の夢想』岩波文庫、1960年、pp.97-98。強調は原文ともに引用者。）

ここには、アリストテレスが「^{アンティペゴントス}応報・相互給付」として語っている社会関係の内実が、じつによく示されている。

- 8.『[住民投票運動](#)とローカルレジーム』（中澤秀雄 ハーベスト社 2005）、『[ボランティア活動](#)の論理』（西山志保 東信堂 2005）

都市社会学・地域社会学の領域における成果として、この2冊をあげておく。どちらも、相対的に若い研究者によるいわゆる学術書単著であり、ともに最近第1回日本都市社会学会若手奨励賞（2006）を受賞した作品である。社会学における都市・地域

社会研究は、理論研究と実証研究の橋渡しをどのようにおこなうことができるのか、またその難しさはなんなのかを、この2冊は新しいテーマで教えてくれる。前者は、第33回藤田賞（東京市政調査会、2006）、第5回日本社会学会奨励賞（2006）も受賞している。後者も、日本NPO学会奨励賞（2006）を受賞するなど、ともに複数の学界賞を受賞している作品である。また、二階堂裕子『民族関係と地域福祉の都市社会学』（世界思想社、2007）は、第1回地域社会学会奨励賞を受賞している。

ただし、学会賞というのは、学会の議論の「水準」と選考委員の「好み」の相関で毎年決定されるものであることは、理解しておいた方がよいだろう。出身大学とそれにつながる派閥（＝学閥）関係の「^{テクネー／アルス}相関技術」の表現と言ってもよいかもしれない。

人間の^{テクネー}技術は、必然よりもはるかに弱い。（アイスキュロス）

9.『グローバリゼーション』（R・ロバートソン 東京大学出版会 1997）

1980年代以降の都市や地域の変容は、グローバリゼーションの問題抜きには語れない。とりわけ経済のグローバリゼーションは、ロンドン、ニューヨーク、東京の世界都市化をもたらすなど各国の都市や地域に大きな影響を与えてきている。しかし、この本が問題に

しているのは経済のグローバリゼーションのつぎの問題、すなわち文化のグローバリゼーションである。普遍主義と個別主義の問題、文明化の過程の問題、さらに日本におけるグローバリゼーションの問題と日本の宗教の問題が直接に論じられている。もちろん、政治のグローバリゼーションの問題もある。

以上の議論は現在、ユーラシア大陸レベルでは、ヨーロッパ統合の東方展開の問題、東アジア共同体の西方展開の問題と、その両統合には含まれたトルコ（イスラーム世俗主義）、インド（ヒンドゥー教的多元主義）、ロシア（ロシア正教）の文化接触のゴールデン・トライアングルの問題となっている。グローバル化は同時にグローカリゼーションでもあり、そのユーラシア大陸レベルでの実現形態^{エネルギー}が問題になっているのである。

他方、グローバル化による文化変容を扱ったものとしては、ミシェル・ヴィヴィオルカ『レイシズムの変貌』（明石書店、2007年）も、好著である。2001～2002年、パリでの在外研究時に国立社会科学高等研究院でミシェルのゼミやかれの研究室で長時間にわたってフランス語でおこなった議論は、わたしの今日の社会的文化研究の基礎になっている。現在、基礎研究から少しずつ離陸しつつある、フランス・スペイン国境の^{コムニタッド・アウトローマ・ヴァスカ}バスク地域社会に関する研究プロジェクトも、ミシェルのゼミへの参加が端緒になっている。思い起こせば、在外研究のためにイタリアのローマからパリに夜行列車で着いて一週間のうちにおこったのが、ニューヨークでのあの9・11であった。わたしは、なにが

起こったのか理解できずに、地下鉄駅ポルト・ド・クリッシーの上に建つパリのアパート4階の一室で、繰り返し流されるテレビ映像をただみつめていた。映像は、ほぼリアルタイムであったと思う。

Haben Sie nie bemerkt, daß, wenn ein Russe >vier Stunden< sagt, es nicht mehr ist, als wenn unsereins >eine< sagt? Leicht zu denken, daß die Nonchalance dieser Menschen im Verhältnis zur Zeit mit der wilden Weiträumigkeit ihres Landes zusammenhängt. Wo viel Raum ist, da ist viel Zeit, -man sagt ja, daß sie das Volk sind, das Zeit hat und warten kann. (Thomas Mann, Der Zauberberg, 1960, S. Fischer Verlag, S. 339)

「あなたはまだお気づきではありませんか、ロシア人の『4時間』は、われわれの『1時間』とだいたい同じではありませんか。あの連中の無頓着な^{フエアヘルトニス・ツアー・ツァイト}時間感覚、これはかれらの国の未開の広大さと関係があるとも考えられます。^{フイール・ラウム}空間が多いところには^{フイール・ツァイト}時間も多、というわけでしょうか。・・・かれらは時間があり、そして待つことのできる民族だといわれています。」（トーマス・マン、高橋義孝訳『魔の山』新潮文庫、上巻、1969年、p.504。強調は原文のイタリック・訳文のルビともに引用者。）

10. 『回想の福武直』（追悼文集刊行会 東京大学出版会 1990）

丸山眞男の政治学、大塚久雄の経済史学、福武直の社会学は、かつて三つ揃いでよく話題になった。わたしが大学にはいって

最初に手にした社会学の本は、福武直・濱島朗編『社会学』有斐閣、第2版であった。地域社会学・村落研究における構造分析というのは、日本農村の社会的性格をつかもうとするなかで福武直が命名した方法である。地域社会学の源流は福武直の社会学なのである。この『回想の福武直』という本は、生前の福武の人柄とかれが育てた人間の幅の広さを知ることができる本であると同時に、社会学における地域社会研究の生成をめぐる関心を知ることができる貴重な本である。

現在、地域社会学は、すでに(4)⑨の第二段落で述べたようなユーラシア大陸レベルのグローカリゼーションにどうむきあうか、その方法的基準の再考が求められている。たとえば、1990年代末からグローバリゼーションにひきずられるかたちで進行したインドの近代化やそれにともなうインドの村落共同体の変動が、^{グローバル・シティ}世界都市・東京の東部、江戸川区の西葛西や江東区の大島6丁目で形成されつつあるインド人コミュニティの特質とどう関係しているのかを、新しいグローバルな地域構造の生成の観点から問題にできなければならないであろう。またこのとき、同時に、1960年代初頭に福武が調査したインドの「村落共同体」と2010年代に東京で見られるインド人コミュニティの共通性と差異が、近代化とそのモデルへの世界史的反省(ポスト近代 = postmodernity か、後期近代 = late modernity か、横断的近代 = transmodernity か、第二の、反省的近代 = reflexive modernity か、あるいは多元的近代 = multiple modernities)

かといった)の流れのなかで、把握されなければならないであろう。

ちなみに、福武は、富永健一の全体社会モデル同様、1950年代に広まった普遍的近代 (universalistic modernity) の一元的モデルを前提に、「農村社会の民主化と近代化」を課題にしていた。同時にそれは、国民的近代化 (nationalistic modernity) のモデルでもあった。そのことがいま、鋭く問われている。ヒンドゥスタニ語文明、イスラーム文明 (中東、東南アジア、アフリカ)、ロシアービザンチン文明、南アフリカのバントゥー語文明、ラテンアメリカ文明、中国文明や東アジアの他の文明 (日本、朝鮮、ベトナムなど)。世界各地の古代からの文明・文化の復興運動が、あるものは伝統文化の^{レジリエンス}適応能力といった旗を掲げて、西洋近代に向き合って沸騰している。そのことを、ナショナルなものが相対化されつつある国民国家のなかで、グローバルな地域統合を念頭に、どのように受け止めるのかが問われている。

δηλον οὖν ὅτι τούτους ὅρους τρεῖς ποιητέον εἰς τὴν παιδείαν, τό τε μέσον καὶ τὸ δυνατόν καὶ ὀπρέπον.

(Πολιτικῶν, 1342b, 33 -35)

("It is clear therefore that we should lay down these three canons to guide education, moderation, possibility and suitability.," trans. by H. Rackham, 1932, Harvard University Press (Loeb), p. 675)

「三つのもの、すなわち『中的なもの』と『可能なもの』と『適したもの』を、教育のための目標にしなければならない。」（強調は原文ともに引用者）

μηδενί συμφορᾶν ὀνειδίσης. κοινὴ γὰρ ἡ τύχη καὶ τὸ μέλλον ἀόρατον.

Ἰσοκράτης

「災難についてだれも非難するな。運は共通であり、未来のことはわからないのだから。」（イソクラテス）

(5) 先生の代表的な著書または論文を二つか三つ教えてください。

1. 岩永真治 (2022) 「対面行動の社会的変容についてー感情理性（ヘクシス・メタ・ロゲー）主義宣言ー」 明治学院大学社会学・社会福祉学会編、Socially、第30号、pp. 35－57
2. 岩永真治 (2021a) 「コロナ禍の地域社会において何が問題になっているのかー行動性向としての＜健康＞＜介入＞＜まちづくり＞に関する社会学的考察ー」 地域社会学会編『地域社会学会ジャーナル』創刊号、pp. 67－74

3. 岩永真治 (2021b) 「＜フィルターX＞とはなにか ― 身体性向としての社会的距離に関する一考察―」同上社会学・社会福祉学会編、Socially、第29号、pp. 81－89

* ①は新型コロナ禍においてオンライン・コミュニケーションが拡大するなかで、人間の対面行動の「表舞台」(front stage)「裏舞台」(back stage)「楽屋」(off stage)の力関係が歴史的に変容しつつあるリアリティについて論じています。②は、2021年5月30日にやはりオンラインで開催された地域社会学会における諸報告と議論に対する批評論文として書かれています。一方、③は、新型コロナ禍で生じている社会現象のなかで、「健康」をめぐって政策的な課題になっている「社会的距離」(social distancing)について、理論的な考察を行っています。

δοκεῖ δ' ἐν τῷ φιλεῖν μᾶλλον ἢ ἐν τῷ φιλεῖσθαι εἶναι. σημεῖον δ' αἱ μητέρες τῷ φιλεῖν χαίρουσαι.

(Hθικα Νικομαχεια, 1159a, 27-28)

Magis autem ea consistere videtur in eo, ut quis amet, quam in eo, ut ametur.
Atque hoc ipsum matres indicant, quibus ipsum amare est voluptati.

(Aristotelis Opera Omnia, Volumen Secundum, Parisiis, M
DCCC LXXXIII, p. 97)

It (friendship) seems to lie in loving rather than in being loved, as is indicated by the delight mother take in loving.

(by W. D. Ross, revised by J. O. Urmson, The Complete
Works of Aristotle, Volume Two, Princeton University Press, p. 1833)

in its essence friendship seems to consist more in giving than in receiving affection: witness the pleasure that mothers take in loving their children.

(by H. Rackham, *ibid.*, p. 483)

Friendship seems to consist more in loving than in being loved. A sign of this is the enjoyment a mother finds in loving.

(by T. Irwin, *ibid.*, p. 222)

Pero parece que ésta (la amistad) consiste más en amar que en ser amado: la prueba es que las madres se complacen en amar.

(by José Luis Calvo Martínez, *ibid.*, p. 282)

Die Freundschaft beruht, wie es scheint, mehr auf dem Lieben als auf dem Geliebtwerden. Beweis dafür sind die Mütter, die ihre Freude am Lieben haben.

(by Gernot Krapinger, 2017, *Nikomachische Ethik*, Reclam, S. 221)

「友人関係（＝友愛）というものは、愛されることによりも、むしろ愛することに存すると考えられる。愛することをもって悦びとしている母親たちがまさしくその証左である。」

(高田訳『ニコマコス倫理学』下巻、p.87。ルビによる強調と括弧内の説明は引用者)

μᾶλλον δὲ τῆς φιλίας οὐσης ἐν τῷ φιλεῖν, καὶ τῶν φιλοφίλων
ἐπαινουμένων, φίλων ἀρετῇ τὸ φιλεῖν ἔοικεν. ὥτ' ἐν οἷς τοῦτο γίνεται κατ'
ἀξίαν, οὗτοι μόνιμοι φίλοι καὶ ἡ τούτων φιλία. οὕτω δ' ἂν καὶ οἱ ἄνισοι μάλιστ'
εἶεν φίλοι. ἰσάζονται γὰρ ἄν. ἢ δ' ἰσότης καὶ ὁμοιότης φιλότης, καὶ μάλιστα μὲν
ἢ τῶν κατ' ἀρετὴν ὁμοιότης.

(ibid, 1159a, 34-1159b, 4)

As then friendship consists more especially in bestowing affection, and as we praise men for loving their friends, affection seems to be the mark of a good friend. Hence it is friends that love each other as each deserves who continue friends and whose friendship is lasting. Also it is by rendering affection in proportion to desert that friends who are not equals may approach most nearly to true friendship, since this will make them equal. Amity consists in equality and similarity, especially the similarity of those who are alike in virtue.

(by H. Rackhem, ibid., p. 483)

Friendship, then, consists more in loving; and people who love their friends are praised; hence, it would seem, loving is the virtue of friends. And so friends whose love corresponds to their friends' worth are enduring friends and have an enduring friendship. This above all is the way for unequals as well as equals to be friends, since this is the way for them to be equalized. Equality and similarity, and above all the similarity of those who are similar in being virtuous, is friendship.

(by, T. Irwin, ibi d., p. 223)

And since friendship is present more in loving, and those who love their friends are praised, the virtue belonging to friends seems to be loving, so that those between whom this takes place in accord with worth are lasting friends, and their friendship is lasting. And it is especially in this way that those who are unequal might be friends, since it could equalize them. Equality or similarity is friendship, and especially the similarity that comes from virtue.

(by Joe Sacks, ibid., pp. 154-155)

Wenn aber die Freundschaft mehr auf Liebe beruht und man mehr jene lobt, die ihre freunde lieben, dann scheint die Tugend der Freunde eben das Lieben zu sein, sodass jene, bei denen das der Würdigkeit entsprechend geschieht, als Freunde beständig sind und ebenso auch ihre Freundschaft. So könnten wohl auch Ungleiche am ehesten Freunde sein; denn das würde zwischen ihnen einen Ausgleich bewirken. Gleichheit und Ähnlichkeit bedeuten Freundschaft, und allem die Ähnlichkeit in der Tugend.

(by Gernot Krapinger, 2017, Nikomachische Ethik, Reclam, S. 222)

Dado que la amistad reside, más bien, en amar — y que elogiamos a los que aman a sus amigos — parece que el amar es la virtud de los amigos, de manera que en aquellos en los que se da conforme al mérito, éstos son amigos duraderos lo

mismo que su amistad. Por otra parte, aquellos que son desiguales serían amigos precisamente de esta manera, porque alcanzarían la igualdad. Pero la <amigabilidad> consiste en igualdad y semejanza — y sobre todo en la igualdad de los virtuosos, pues, siendo perseverantes por sí mismos.

(by José Luis Calvo Martínez, 2001, Ética a Nicómaco, Alianza editorial, p. 282)

「友人関係（＝友愛）はむしろ愛することによって存するのであってみれば、そして『友を愛するひとびと』は賞賛されるのであってみれば、親愛なひとびとの卓越性なるものは、愛することによってあるように思われる。したがって、お互いの間においてこの愛することによって価値に応じて行われているひとびとは持続性のある友であり、彼らの友人関係（＝友愛）は持続性を帯びている。均等ならぬひとびとがやはり友たりうるのは、なによりもかかる仕方においてである。これによって彼らは均等化されるわけだからである。親しき φιλότης は均しき ισότης であり 類似性 ὁμοιότης — 殊に 人間的な卓越性において類似的であるようなひとびとのあいだにおける類似性 — にほかならない。」

(同前訳、p.88。カタカナ・ルビなどの強調は訳者によるもの。括弧内の説明は引用者による挿入)

そして、続く著作『政治学』の中では、つぎのようにもいっている。

ὁ γε φίλος ἴσος καὶ ὅμοιος.

(Πολιτικῶν, 1287b, 33--34)

a friend is one's equal and like.

(by H. Rackham, p. 269)

friendship implies likeness and equality.

(by B. Jowett, 1984, in The Complete Works of

Aristotle, *ibid*, p.2043)

El amigo es un igual y semejante.

(by Carlos García Gual y Aurelio Pérez Jiménez, 1986,

Política, Alianza editorial, p. 185)

「親しい友人というものは、均等で類似のものである」

そして、つぎのようにもいっている。

οἷον δοκεῖ ἴσον τὸ δίκαιον εἶναι, καὶ ἔστιν.

(Πολιτικῶν, 1280a, 12, 1310a, 30 -33)

「たとえば、『正しいこと』とは『均等であること』であると思われる、そして事実、そうである。」（強調は原文ともに引用者）

そして、

ἡ δὲ πόλις κοινωνία τίς ἐστι τῶν ὁμοίων.

(Πολιτικῶν, 1328a, 36-37)

The state is one form of partnership of similar people.

(by H. Rackham, p. 571)

La ciudad es una comunidad de seres semejantes.

(by Carlos García Gual y Aurelio Pérez Jiménez, ibid, p. 328)

「都市は、類似の（そして均等な）者からなる共同体（＝共同態）の

一種である。」（括弧内の挿入は引用者による付加説明）

また、人間の幸福をめぐる以下の文章も紹介しておきたい。

οἱ τοι πέρα στέρξαντες, οἱ δὲ καὶ πέρα μισοῦσιν.

(Trag. incert. fr. 78 Nauck, from Πολιτικων, 1328 α, 14-15)

「あまりに深く愛した者は、また深く憎む」

ὥς ἀληθῶς γὰρ πρὸς γε μίαν διαίρεσιν οὐδεὶς ἀμφισβητήσειεν ἂν ὥς οὐ
τριῶν οὐσῶν μερίδων, τῶν τε ἐκτὸς καὶ τῶν ἐν τῷ σώματι καὶ τῶν ἐν
τῇ ψυχῇ, πάντα ταῦτα ὑπάρχειν τοῖς μακαρίοι χρή.

(Πολιτικων, 1323a, 23-27)

For as regards at all events one classification of things good, putting them in three groups, external goods, goods of the soul and goods of the body, assuredly nobody would deny that the ideally happy are bound to possess all three.

(by H. Rackham, *ibid.*, p. 533)

Certainly no one will dispute the propriety of that partition of goods which separates them into three classes, viz. external goods, goods of the body, and goods of the soul, or deny that the happy man must have all three.

(by B. Jowett, 1984, in The Complete Works of Aristotle, ibid, p. 2100)

「実際、善きものを三つの部分、＜肉体の外にある善きもの（生まれつき、富、権力、名誉、友人をもつことなど＝外的な善）＞＜肉体のうちにある善きもの（健康、強壮、身体美など＝^{フィジカル}肉体的な善）＞＜魂のうちにある善きもの（倫理的卓越性、知性的卓越性など＝内的な善）＞に分ける一つのカテゴリにも、そしてそれらがすべて幸福なる者には備わっていなければならないということにも反対する者は誰もなかろう。」

（山本 訳、前掲書、1323a、p.307。訳は若干変更。＜＞ほかによる強調は引用者。（）内の説明は、引用者による挿入。なお、『ニコマコス倫理学』1098b12-20 も参照 - νενεμημένων δὲ τῶν ἀγαθῶν τριχῆν, καὶ τῶν μὲν ἔκτος λεγομένων τῶν δὲ περὶ ψυχὴν καὶ σῶμα: Rackham, p. 36, Now *things good* have been divided *into three classes*, *external goods* on the one hand, and *goods of the soul* and *of the body* on the other. イタリックによる強調は引用者）

ἐπεὶ δ' ἐστὶν εὐδαιμονία τό ἄριστον, αὕτη δὲ ἀρετῆς ἐνέργεια καὶ χρῆσις τις τέλειος.

(ibid, 1328a, 38-39)

Since the greatest good is happiness, and this is some perfect activity or employment of virtue.

(by H. Rackham, p. 571)

La felicidad es lo mayor y esta es una energia y uso perfecto de virtud.

(by Carlos García Gual y Aurelio Pérez Jiménez, ibid, p. 328)

「最善なるものは ^{エウダイモニア} 幸福 であり、幸福は卓越性 ^{アレテ} (=徳) の完全なる実現、あるいは ^{クレシス} 使用 である、・・・」(山本 訳、前掲書、p. 327。強調は原文ともに引用者。一方、「幸福」に関しては、『ニコマコス倫理学』

1098b20-21 に、つぎのような規定がある: συνάδει δὲ τῷ λόγῳ καὶ τὸ εὖ ζῆν καὶ τὸ εὖ πράττειν τὸν εὐδαιμόνα. σχεδὸν γὰρ εὐζωΐα τις εἴρηται καὶ εὐπραξία: Rackham, pp.37-39, Again, our definition accords with the description of the *happy man* as *one who 'lives well' or 'does well'*; for it has virtually identified happiness with *a form of good life or doing well*. イタリックによる強調は引用者)

τὸ δὲ μᾶλλον ἐπαινεῖν τὸ ἀπρακτεῖν τοῦ πράττειν οὐκ ἀληθές. ἡ γὰρ εὐδαιμονία πρᾶξις ἐστίν, ἔτι δὲ πολλῶν καὶ καλῶν τέλος ἔχουσιν αἱ τῶν δικαίων καὶ σωφρόνων πράξεις.

(ibid, 1325a, 31-34)

Errat autem qui nihil agere potius esse dicit quam agere. Felicitas enim est in agendo, et justorum ac temperantium actiones multarum honestarum rerum finem sibi propositum habent.

(by Aristotelis Opera Omnia, Volumen Primum, M DCCC LXXVIII, Ambrosio Firmin-Didot, p. 604)

But to praise inaction more highly than action is an error, for happiness is an activity, and further the actions of just and temperate have in them the realization of much that is noble.

(by H. Rackham, ibid., p. 549)

And it is equally a mistake to place inactivity above action, for happiness is activity, and the actions of the just and wise are the realization of much that is noble.

(by B. Jowett, 1984, in The Complete Works of Aristotle, ibid, p. 2103)

「また、無為であることを行為すること以上に賞讃するのは、本当ではない。なぜなら、^{エウダイモニア}幸福とは^{プラクシス}行為であり、そしてその上正しき人や節制ある人の行為は多くの美しく立派なことを為し遂げるものだからである。」（同上、山本訳、1325a、p. 315。強調は原文ともに引用者。訳語を一部変えてある。）

ἀρετὴν δὲ λέγομεν ἀνθρωπίνην οὐ τὴν τοῦ σώματος ἀλλὰ τὴν τῆς ψυχῆς. καὶ τὴν εὐδαιμονίαν δὲ ψυχῆς ἐνέργειαν λέγομεν.

(H .N ., 1102a, 16-17)

「人間の^{アレテ}卓越性というのは、われわれの見方では^{プシューケー}魂の^{アレテ}卓越性であって、^{ソーマ}身体^{アレテ}の卓越性ではない。われわれの^{エウダイモニア}幸福の定義もまた、^{プシューケー・エネルゲイア}魂の活動である。」

(強調は原文ともに引用者)

最後に、社会関係の理解を深めるために、シェイクスピアの戯曲からつぎのような文章を引いておこう。是非、そのリズムもふくめて原文でも味わってほしい。

Is not thy kindness subtle, covetous,
If not a usurping kindness and as rich men deal gifts,
Expecting in return twenty for one ?

(W. Shakespeare, Timon of Athens, J.W.Craig, ed., 1954,
Complete Works, Oxford University Press, 517 -519, p. 815)

「お前の好意は、裏のある、^{どんよく}貪欲な、高利貸しの好意ではあるまいな、一の贈り物をして二十のお返しを期待する金持ちと同じではあるまいな？」

(小田島雄志訳『シェイクスピア全集：アテネのタイモン』白水Uブックス、1983年、p.142。強調は原文ともに引用者。)

*^{ソーシャル・インタラクション}人間の相互行為についてリアリティのある考察をするばあいには、以上のような引用に表現されている事象をどのように統一的な枠組みで理解することができるかが重要であると、わたしは考えています。また、ここではグローバリゼーション／グローカリゼーションがもたらすポリフォニックな（多言語・多音韻使用の）社会環境

を意識してもらうために、引用文の日本語に一元化された意味の提示ではなく、原＝言語の表現の多様さや豊かさを感じてもらうために、あえて多数の原文を併記しました。なお、訳書名が書いてない引用は、わたしが直接古典ギリシア語やドイツ語などから訳しています。

Posted on April 1, 2023